

非  
諸  
叢  
訂  
題  
叢

前  
編

夏

5
4312
2





解社夏白紙卷夏總目錄

夏之上

四月

卯日

夏之二

夏之四

臨

白重六

夏衣

羊物

青卷

箴六集

夏衣七

純米

子園子

灌仙

花摘八

花師半

羊鄰端

夏箴

夏衣九

夏書

夏新

夏衣

茶酒

古菜

風抄

夏衣

雜十

松魚

夏秋土

總夏十二

夏衣

牡丹十三

夏藥十五

燕子花十六

花藥十八

玉卷荷





玉簪芭蕉十九	紫羅傘 <small>ハツ</small>	嬰刺棠 <small>二十</small>	芭蕉花 <small>廿二</small>
豆花	風車	石蒜	茨花
躑躅花	美人草	柔荑草	印花 <small>廿三</small>
印花腐苗	若楓	若菜	藤菜 <small>廿七</small>
扶若菜	若菜花	若菜	若菜
實椽	木草茂 <small>廿八</small>	木下周	常盤木 <small>廿九</small>
竹蔭系	桐花	柚花 <small>廿九</small>	喜山椿
根穀花	栲花	繡繡花	白丁花 <small>三十</small>
藪楮	榎桐花	花茄子	狗茄子
茄子	荀 <small>卅一</small>	條子 <small>卅二</small>	藤
藤	郭公 <small>卅三</small>	常考入 <small>卅</small>	老常 <small>卅一</small>

カニコトリ 四十二	鷹入切	養鸞	割草 <small>カヤウクシ</small> 四七	葎 <small>ヨシキリ</small> 四六
飛騨	粒判	致貴 <small>チキ</small> 四八	枝桂	氷馬 <small>ミツスマ</small>
蛇衣脱	夏 <small>夏</small>	鴨牛 <small>カウ</small> 四九	子子	軸 <small>ハシ</small> 五〇

五月 <small>五十一</small>	葛蒲	葛蔭	軒葛蔭
葛蔭	葛蔭湯	葛蔭刀	葛蔭
菜玉	平地寺	百株鏡	粽
拍餅 <small>五十二</small>	懐	割拭兜 <small>五十五</small>	菜菜摘
菜日	加茂競馬	竹餅日 <small>五十六</small>	花蔭

題叢自録







小絲

海老嵐ホヤ 九五 有五日

六月曇

六月雲

六月雨 九十五

梅雨

梅雨曇 九十八

六月雨

六月曇

虎之雨

短夜 九十九

紙帳 百六

帷子夏

夏月夏

故帳 百五

紙帳 百六

惟子夏

夏月夏

夏月夏

晒布 百八

晒布

夏月夏

夏月夏

夏之下

六月 百九

水之月

水家

夏水 百十

水餅

一袋酒

祇園会

嘉定 百十一

坐臥納涼

富士詣

鞍馬竹伐

中夏生

七月

虫干

夏日 百十二

暑 百十三

炎天 百十四

日盛

夕立 百十五

夏雨 百十六

夕露

旱

雨乞

雲峰 百十七

扇 百十八

團扇 百十九

汗 百二十

汗拭

拭衣

日傘

簞

竹婦人 百廿一

竹奴

抱蓆

蓆枕

涼 百廿二

納涼 百廿五

風蕙 百廿七

抄水

清水 百廿八

晒井 百廿九

麻地酒 百三十

心古

膏水

冷瓜

送佛寺

冷汁

水粉

水飯

冷湯 百卅一

干飯

梅干

香需教

菽植

漆取

枇杷

揚梅

李

林檎

百日紅



夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳

夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳
夏生	甜瓜	新麥	秋子花	藍川	紫蘇	天竺	菊	荷	何骨	夏柳

題叢目錄



門 へ 5  
號 4312  
卷 2

夏月詠

俳諧歌句

題叢夏上

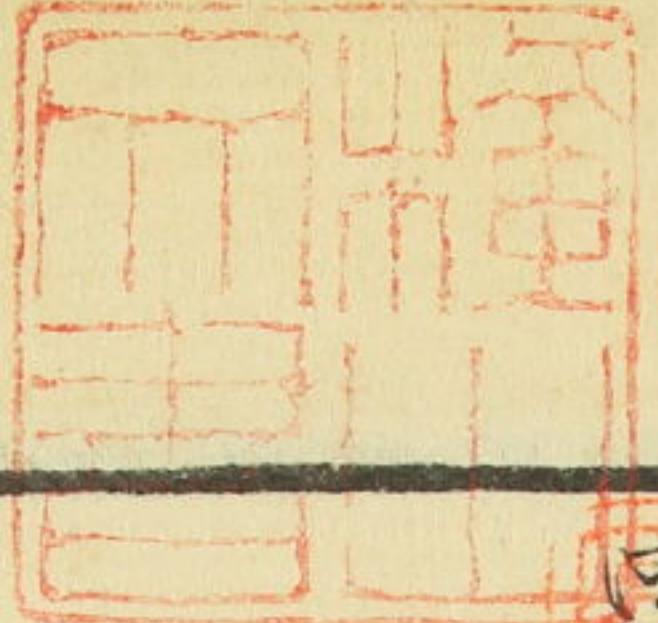
椿五太斧輯

四力

解かれてありたけそ此四力如  
胡麻くまて牛ふりたる四力如  
雪の孩えもてとよ四力如  
つらとえによるふれ四力如  
夢の華れ本らうる四力如  
まことの定にれつく四力如  
雪の心路れくる四力如  
雪に危れ小里れ四力如  
半多く吼る四力如

曉基  
重厚  
五明  
卧央  
斗入  
恒丸  
琪六  
存亞  
平角

題叢夏



文  
15-2







又礼や信ハ星ノ路ハ白し  
大名此を人たてり又礼  
又礼ハ牙羽ふた刀佩ん  
酒吞の播屋さね礼ノ人  
りるるや狗ふあそび又礼  
病人のこゝやこゝ又礼ノ  
又礼協の半糸わらうり  
古衣をと家毎に持て又礼  
りのくれハ淋おものも又礼  
風とれハ登ハ可たかり又礼  
心王下ふと人ちれハ礼ノ

公 百 曉 今 白 几 洪 白 斗 又 喜  
公 百 曉 今 白 几 洪 白 斗 又 喜  
川 明 基 今 旗 董 初 園 入 明 川

又礼額と母礼多しハ  
りるるハ又の之の又礼  
老われハ額おもひ又礼  
礼ノ松ハ星のつふれり  
大さハ子に譲り礼ノ  
りねまを礼おれ礼ノ  
手の又と行まらり又礼  
又礼表ハうつけてさねり  
りしていれハあり又礼  
袖の針れようは又礼  
襟と結とやこも礼ノ

公 成 肩 拱 井 植 士 松  
公 成 肩 拱 井 植 士 松  
可 洪 今 成 肩 拱 井 植 士 松  
款 有 今 成 肩 拱 井 植 士 松  
星 有 今 成 肩 拱 井 植 士 松

題叢夏

〇二



礼と己の姿ハ意味ナシ之礼  
花久根つるねねそのころね  
人中に地をんうりて礼  
方にはほねうちハ淋まて礼  
猿人ハくすぶく在り人  
妻や母よりやねあるは松の松  
志しければ地のうりや又礼  
ついにねねおてころり人  
礼うてふてしにたり杜の  
吹くと交はねたり又礼  
右より以命の先に又礼

大阜 乙二 岳輪 道差 月居 養比 祥木 匪侯 魯隱 雲旋

礼うていてそく人をなれり  
更礼ゆやうその志のほろり  
印赤子とねくくえん又礼  
人うりくくくくり言礼  
吉そのんくくや礼人  
昔の良のほろりや礼  
わがうて杜斗咲りね神くし  
ね世の子れそく又礼  
り灯と土る人ねり又礼  
花うて女子れくく礼  
考の姿ねねにけり又礼

陸奥 吾石 葵亭 号笠 一茶 菊也 之世人 似藤 世竹 春耕 左文 有吾

題義是

〇〇  
三







清素に墨引れたる初秋  
秋風や又入道に似せし  
飛鳥のささるる秋の  
道草のちびるる秋の  
秋風や本渡らんよもえか  
とと出て見ればさうり秋  
初秋乍らもあまをわたり  
秋風よと流のよれあはる  
あちろくもとちと見え初秋  
秋風やあつくりくる親子  
秋風や心沸しむる風

平角 長高 眞く 元句 雁風 文角 遠字 井古 左逸 久感 香風

白 電

白布の晴るる秋のよのち  
白き心交れ秋のよのち

葵花 芦雁

夏 礼

菊の人の交れ秋のよのち  
暮の眼をましり秋のよのち

秋花 秋鳥

青 単 物 簾

青の葉や酒のしめたる秋の  
葉の葉や酒のしめたる秋の  
瓜先を恋のよのち  
秋風や心沸しむる風

瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

題 叢 夏







千園子  
灌佛

ほろろおんくまの志をうけし園子  
漢仙や二本の指はるや一葉の  
青陽をけし仙にうけし旭の  
流仙や夕べの星をよる柳陰  
ちるまを此中にせしむる仙の  
きのあかきありしや仙の  
流仙やつとをわかれ葉の本原  
流仙のたがやあまはるをたが  
筆と一度にそたつぬる  
天をうら甘が仙の青陽か  
肌脱て着さるる世や仙も云

詠吟  
魚醉  
園更  
葵大  
古産  
白旗  
今  
存  
松  
完  
成

花  
痛  
花柳堂

うぶ人もしいささか仙も云  
流仙や又の生るるもあま  
あくて仙の生れうらむり  
松風のよの子も吹や仙も云  
流仙や世のうらををんを  
流仙やうらも一里ん咲そめ  
本をまじりて生れし仙も  
流仙や孝懸本にける世の自  
明るるも摘兜の松を云  
君り代や四百八十花柳堂  
花柳堂の流るるもあま

道亮  
蕉  
田人  
犯  
仙  
女  
身  
土佐  
瀬江  
一水  
天外  
鳥醉  
葵大



竿擲碁

花は虫を食つたといふは  
蛇のよゝといふは  
そこをたれしことを  
誰かや取らぬといふは  
これかたはこれか  
はら花今残して  
交はるる人の  
交はるる人の  
交はるる人の  
交はるる人の  
交はるる人の

花

曉  
百  
左  
換  
金  
彦  
白  
年  
宜  
至  
長

夏 籟

交 花

小 花

交 書

清くは書に  
ふ二節交  
夕陰や駕の小  
舞の物  
交百の  
りそ  
志の  
い  
花  
交  
う

白  
乙  
一  
護  
尋  
瓜  
几  
大  
祐  
乙  
長

題 兼 夏







松魚

跡志あるついで先や海の音  
活て来るまのれよるし初鰯  
板のりおふ些人よ初鰯  
地を走るあまを聞し鰯賣  
あまをた偽るし初鰯  
面月の妻あふちや初鰯  
これてを後に死なれ初鰯  
ひさしや鰯の養ふ後の節  
そしつて不陸夫のそく初鰯  
初鰯魚下り汲者の魚取職  
そのめの下をばし不初鰯

丹波 長瀬  
多解  
今 鰯甚  
今 鰯  
今 鰯  
百 鰯  
保 吉  
以 足  
恒 丸

麦秋

その戸や人のあまの初鰯  
うけまの周れむちる初鰯  
うけ解まむまをいしけ初鰯  
初鰯はあふてうらむ初鰯  
初鰯魚れん花のまもあえ  
うらむの初られ鰯も自費か  
暖ハ友の花うり初鰯  
ふあもろくろむれり初鰯  
ぬ厚のやあもほふ初鰯  
目甲は賦し初鰯あはたし  
まうちやうらむをまむく竿の光

お換  
鰯 洞  
鰯 人  
一 茶  
一 茶  
道 虎  
一 子  
五 旗  
標 出

題叢夏



飯盛正狐道よりや麦の穂  
病人の号舞も色より麦の穂  
梳舞し（きりやまうし秋の号  
乞食せんせはあそびん舞麦  
方圓の宛中より宛麦の穂  
麦穂や赤ふんも（きり）か  
麦穂や埃の中と産て取  
麦畑の（きり）雲似りや霞電は帯  
麦刈りの神や袂も麦の穂  
麦穂や掃に人りひし  
田を掃て後に麦刈の田

吾お  
公  
葵  
公  
曉甚  
百  
几  
公  
洲  
誦  
擗

穂 麦  
青 嵐  
麦の穂をいりりりりり  
麦穂やあはれは花のひたき  
柳木もよみよみや麦の穂  
飯麦の左靴氣に麦の穂  
源久々々のさるや麦の杖  
麦秋をまつまはるや原巻麦  
麦の穂を産の（きり）戸に  
きりきりきりきりきりきり  
荒破やりりりりりりり  
（きり）田や天巻拾ふ麦あり  
（きり）（きり）麦の先をうらりり

稗  
白  
岳  
木  
二  
川  
林  
枝  
出  
淋  
心  
擗  
素  
葵  
白  
棧  
公

題筆五八



古瓦崩ハたれ落に落る如  
り持の筆れきとまをあり  
麦刈のよにきりきりきり  
中入れてたてふゆききり  
砂村やまの東風ふきまのう  
目のやのまれまのこま 瓦  
ままらぬふお花のまありし  
仲更なる程のまやまを瓦  
ま瓦より下小流のまえまを  
筋道に小村をきりきりきり  
岡との通れといふまありし

保吉  
百助  
麦二  
士朗  
恒九  
寺大  
大舟  
道彦  
人  
甚堂  
千蔵

牡丹

古瓦起出てえれハまありし  
古瓦麻の辺出に禁 〇丸  
情壺に吹とまりたりきり  
花より月を抱たり白牡丹  
百あの方をい巻燃る牡丹  
巻とらまの衣を巻る牡丹  
牡丹切て守の巻へし夕丸  
ちりては侍れたつ月丸  
白きの衣ゆききて牡丹丸  
ちをきりてち欄に牡丹丸  
りた本の花脚りて厚丸丸

路ノ人  
琴糸  
嵐谷  
覚甚  
几菴  
白権  
甚お  
瓜  
葵丸  
瓜  
大江丸

題兼夏



ば取れ人きつたつてんか  
 久遠おきまうし牡丹此ハ重香  
 及びれてううし庭の牡丹か  
 時人とききぬ敷ひつちる牡丹  
 とやうと牡丹つりてむ塀の内  
 常の敷うきつたつてんか  
 貴人んそしして白牡丹か  
 つちの葉しものうそ牡丹か  
 牡丹好んぢけけすめりり  
 咲出て心のうきさる牡丹か  
 白牡丹ちる時言けりりりり

公  
 松尾  
 希言  
 祐昌  
 士功  
 遅力  
 本僊  
 兼光  
 龜文  
 成英  
 一醒

ぬを係てつりくとる牡丹か  
 君園に入てしりりけき牡丹か  
 ううそ牡丹おきし白牡丹  
 朝風れちる白牡丹もたの白  
 花際を喰んうしたる牡丹か  
 とつてりて友に寄つて牡丹か  
 今のあつたつて牡丹か  
 花のその美もたさう牡丹か  
 り着ても小う牡丹の牡丹か  
 花うつやうすれ牡丹牡丹か  
 ねえと牡丹う牡丹牡丹か

芳之  
 善成  
 今  
 沾嶺  
 展詩  
 一草  
 乙二  
 月居  
 岳路  
 尺天  
 月化

題兼夏



横町の地事新く牡子あ  
不つらりと暮れ牡子のあし  
海山のくしふをりぬ牡子あ  
一輪の牡子終り貴にたり  
くつくも又毎日の片らんあ  
志つそを人けあつて牡子あ  
そまふ版の洞よりし牡子あ  
あ跪て暮ら志つけし牡子  
牡子さくくあてその美をさく  
あ枝を押しけて咲けらんあ  
貴にさるぬらん牡子のふはあ

其堂  
養也  
菊也  
長高  
学笠  
養亭  
意龍  
意白  
菊也  
養人

陸奥

女志宇

向牡子咲て十りをりたれ白  
町人の獲りめり片らんあ  
牡子あらん人いんあ  
ちる花のこくあたる牡子あ  
向牡子風を抱てあらん  
鈴りさけせん牡子にあ  
碎きれて蝶のこらん牡子あ  
もろとれも鈴つけらん牡子あ  
あやのあより白き牡子あ  
牡子咲て依に息を起らん  
んともらんや白き牡子の衰はて

秋史  
卓池  
乘靴  
碩布  
星銘  
居然  
五老  
烏頂  
松昌  
丙子

尾出

貞原



万のちれてもは出ま牡子か  
 蝶もも心の遠より牡子煙  
 ちむちやもしけもしに牡子交  
 牡子咲と覚て電まおの衣  
 白牡子様、の迄の及れり  
 贈りして基にこれた牡子か  
 白のりを大りに着る牡子か  
 花といふ牡子もあつた久し  
 いふれを牡子もたふらぬ  
 万葉に廿の歌はるりりり  
 万葉に廻りつるる唐久れ

万波 露井  
尾張 三糸  
駿河 画半  
伊豫 桃序  
伊豫 其松  
伊豫 汝南  
伊豫 桑隠  
伊豫 瑞行  
伊豫 大節  
伊豫 向旌  
伊豫 官又

万葉

又六代万葉つるる心家か  
 万葉や新に絶るりりり  
 万葉にたのしきも前久れ  
 万葉や久しは重の小さかり  
 万葉や才持ふは此鳥鴨子持  
 万葉はいふれもふし咲た久  
 万葉とられ久し妙あり杜そ  
 万葉としや遠く一花く杜そ  
 人くの原をさらしふるそ  
 杜そは橋をさして咲まら  
 仮初に足ささくし杜そ

尾張 宇叟  
尾張 尚心  
尾張 柳居  
尾張 曉甚  
尾張 莫左  
尾張 瓜  
尾張 樽元

燕子花



白に人立もさすやまらけり  
 宗澄れ交れさるる杜若  
 ちしらのまきのふや杜若  
 杜若おんとおふ花をし  
 あす一すく答らりこころけり  
 杜若やさしふ花のりかきお  
 朝風やた今嘆し杜若  
 杜若是るや素や甲一枚  
 りとくけいつくすつ居心杜若  
 杜若あやむるもはうりりり  
 杜若白くく世をも信じてま

終

白樺 保吉 吉麓 希言 蹊道 存無 恒丸 寒崖 成貞 蔭益 之顧

朝のりハ歌も麗し杜若  
 垣石ををんふとあそ杜若  
 人々のうらわさし杜若  
 身にたていお惚れは杜若  
 学のを言のうけは杜若  
 ちりけや又もほけり杜若  
 経書の花ハ咲きり杜若  
 投入ておろくをえや杜若  
 人についてまけけり杜若  
 杜若あそてハ人ハ来さりり  
 生ハ向けておろく杜若

甘谷 可起里 一子 道亮 今 葵亭 養礼 魯隠 雲権 旋削 長高



杜若心やかみきりて嘆きし  
 大庭の情もやふらふら  
 ありけのやまらと飛く杜若  
 花よりし二人の涙 杜若  
 春よりて過る平池の杜若  
 ありて来て小石の杜若  
 杜若酒呑みの為 空  
 燕子花今もふらふらに  
 杜若心は移りぬるも思  
 杜若心は移りぬるも思  
 杜若心は移りぬるも思

寛松  
 申高  
 万和  
 菊也  
 武陵  
 志宇  
 護物  
 子影  
 碩布  
 匪渡  
 秋慶

咲くはたはかきとぬれ杜若  
 空の影くうう 杜若  
 鳥帽子もよし 女提り 杜若  
 朝のうらみも来ぬ之杜若  
 四津の草やまよるる  
 風の皺の花にけりし 杜若  
 杜若同かきとぬれ 杜若  
 盃のちみもよるや 杜若  
 月のちみもよるや 杜若  
 朝花はるを春もよるや 杜若  
 樹のちみもよるや 杜若

漫々  
 我々  
 尼来月  
 郁賀  
 小尼  
 芝心  
 雲翼  
 可来  
 野揚  
 玉光  
 警雲

題叢長



帝のつよの故のせれたり杜若  
甲斐 女馬  
 燕子花にらんとする心二つ  
下谷 栄如  
 まに竹 暖見たりふらけり  
大和 道長  
 赤土の流れるしてふり守る  
巽 杜口  
 若く代の朝にまよふ杜若  
巽 朝氣人  
 日につれて咲きりたりふ葵  
保 園更  
 子をおよぶ親の心をたらし葵  
戸 保吉  
 菊の産や日敷やこころを葵  
戸 栞人  
 と朝に花八月八合より花葵  
下谷 月紀  
 新やうもふかぬ花のうら  
下谷 東鑑  
 菊のそよふや下ふらけり花  
下谷 曉甚

花 葵

ふんせき

玉冠色蕉 井敷への花とび交の芭蕉か  
 紫冠傘 いらそつ平花の海りを活らる  
巽 健勝  
 立臈に刺れよとらふ赤子の心  
巽 園更  
 ちのちとわくし 例たり勝子妻  
巽 園更  
 地蔵の境おろしの巻りれ  
巽 園更  
 白芥子に咲てりる赤子の心  
巽 園更  
 荒海をさうとてくしの咲きり  
巽 園更  
 陽をにゆるく 芥子花一重か  
巽 園更  
 芥子花不見て香るうらみはけりし  
巽 園更  
 芥子の花よふ子人の心ありわか  
巽 園更

嬰 棠

題兼長











何花もちる時ちるくしの花  
義を公て教にくしの不見か  
笑初るくしや徳首指古そ  
菊や花在中のくし  
くしの花華れうたひに動は  
白くしにを雷のもくし  
花くしや打りへきお壁の朝  
白くしに眼をすきんり朝是  
楯の打についてまゝくし  
まゝのまもくしをくし  
松風もまゝくしやくしの花

菊也  
三津人  
蓮葉  
山古  
文常  
其成  
東野  
谷野  
阿量  
茶味  
李尺  
祇鳴

草の花  
蠶豆花  
豆の花  
凡車  
石藤  
茨花

人よりも羽を喰くしのたぐく  
うま肌をを踏されてちよのふ  
蝶に白くくまをくし長も花華  
涙てするまのくまも豆の花  
蝶はまむすくまもくし凡車  
いとまや流とまいもく及れに  
ふ茨古マのたに似る水  
を流てまにまきり茨花  
くしくし茨の花垣邊まそ  
朝くし花標くしくし  
花茨ふら花あうま

漢  
蝶  
芭  
一  
益  
公  
保  
蒼  
力  
化

題  
草  
夏



矣之も仕謀下てんも花の花  
 卯の花にまゝけりも荆の花  
 うつゝに流るるも花の花  
 龍噴まゝけりも花の花  
 是中やそれとまゝけりも花の花  
 堯つに垣方もまゝけりも花の花  
 蝶くもまゝけりも花の花  
 くれくもまゝけりも花の花  
 卯の花に中ゆくも花の花  
 卯の花や色をまゝけりも花の花  
 卯の花や打ての皮の裏も花の花

左 堯  
 岳 輪  
 守 三  
 對 山  
 其 偏  
 可 友  
 兩 考  
 曉 甚  
 白 檀  
 今

卯の花の葉ハまき天守か  
 卯の花よりけり風き小春か  
 卯の花もまゝけり垣方も男か  
 踏えて卯の花つゝ心おるもか  
 卯の花を粉にけりも花の花  
 卯の花の中へまゝけり妻の人  
 いまこゝまゝけり花垣のあしか  
 卯の花の卯流るるも花の花  
 卯の花や櫻もまゝけりも花の花  
 卯の花やまゝけりも花の花  
 卯の花の咲くはを降にけり

存 亞  
 恒 九  
 士 朗  
 袴 崇  
 兼 飛  
 成 員  
 完 素  
 祥 木  
 可 教 里  
 今  
 一 子

題正或夏



麦よりし人れお花咲けり  
 庭よりておの花を平田一枚  
 鳥羽子来ておの花おしむしお  
 うれ花のわりおおめしおあお  
 うれ花や何の目切と考や  
 老の度おの花おまおあお  
 うれ花の残りおおあおの自  
 うれ花に想ひしりてらじり  
 おてえておりておんや花お本  
 うれ花をどおしおあお餘り  
 ひめのおるおけおあお本

乙二  
 乃亮  
 公  
 養元  
 一葉  
 無原  
 権剛  
 亞次  
 漫と  
 東坊  
 葉竹

郊花腐  
 多楓

うれ花にうれおもおけしお  
 うれ花や何れも自おもおけしお  
 うれ花やとておけりおあお  
 うれふや電のふおあお  
 うれ花にぬるおしおあお  
 うれ花に子おのうせしおあ  
 雪の名のぬてお花をうしお  
 梅の口にお花をうしおあお  
 朝くの朝おしおあお  
 おあおのふおあお  
 うれ花をおあお

上  
 川二  
 一  
 其  
 葉  
 左  
 百川  
 保  
 肩  
 長  
 若

題叢夏



そ  
う

能く音に帯ひまゝしつゝ 楓  
つゝ楓を此に造るまゝなるは 次  
つゝ能くと打つたもこのは 楓  
能くハ元も打りしつゝ 楓  
明星此のつゝは家やつゝ 楓  
鉄砲の的のつゝはつゝ 楓  
うまゝとつゝいれもつゝは 楓  
そ楓見せつゝはつゝは 楓  
ふやにせつゝはつゝは 楓  
せつゝはつゝはつゝは 楓  
能く年をさつゝはつゝは 楓

青牛  
及壳  
養乳  
牛水  
麦菊  
麦既  
湖中  
牛可  
桃支  
春焼  
園更

題叢長

里の打とふつゝはつゝは 楓  
きもつゝはつゝはつゝは 楓  
ふつゝはつゝはつゝは 楓  
葱の打れつゝはつゝは 楓  
本々の心もつゝはつゝは 楓  
ふつゝはつゝはつゝは 楓  
何れ本れ花もつゝはつゝは 楓  
傘のつゝはつゝはつゝは 楓  
留るのつゝはつゝはつゝは 楓  
一鉢をさつゝはつゝは 楓  
りしの本れ書もつゝはつゝは 楓

葵大  
公  
荻村  
公  
白旗  
公  
百明  
保  
袋書  
書  
斗入



これにて豆腐やわたりをばけ  
きりておれりしうれさるをば  
ふゆくと音改りるをば  
柴火戸の軟くをば  
とくくと流の流をば  
戸にまて小る来て鳴るをば  
附たり先へ来ておるをば  
あつとつらつらしをば  
傘のちんちんをば  
そらくとおをば  
戸にくとおのをば

存 亞  
希 言  
恒 九  
士 切  
会  
洪 道  
八 風  
粒 又  
棠 兆  
稗 堂  
吳 心

親方のたのしみをば  
口のちりちりもをば  
ふとらへ風のはいをば  
花をいをば  
雲のちんちんをば  
捲つてをば  
おをば  
お風をば  
花の戸もをば  
肉に居てをば  
嘴うとをば

百 堂  
成 貞  
百 毒  
第 星  
心 非  
乙 二  
会  
常 笠  
長 高  
号 老  
塊 翁



又をうしてまゝもくたれ板か  
 子半のつりて度るをを  
 藤のうたゝををまゝのうた  
 破るをを味かりのうた  
 ちりりの目もまゝをを  
 美豆や白のををれま  
 船凡の戸口吹きりむるを  
 むをまゝ人をををるを  
 ありとまゝしやををれ  
 神にうくは計やををれ  
 舟の飯きりまゝををれ

一茶  
 寛松  
 雲枕  
 菅庵  
 舟池  
 秋拳  
 漫々  
 星橋  
 龍峽  
 成蹊  
 嘉山

上より人の心をしし子規  
 初まゝハハれ花のとき  
 存れおまゝをりのうり子規  
 人更にうらむと心部と  
 大元は身つらうけて子規  
 子規をれ戸をそのりお  
 めくありハ部格の流る子規  
 七夜月と松花かして子規  
 合屏れまゝのうらや子規  
 このまゝのうらむし部と  
 時を藤のあゝりの夜の系

全全  
 力化  
 平角  
 尾全  
 養凡  
 全  
 素曲  
 衰丁  
 一茶  
 素園



りかたり習はるる子規  
子規吳越の心とけりり  
り華ハとて経る子規  
子規四り此の心とけり  
子規市に寸心とけり  
子規それと見れば心の清  
白よりていれぬ子規  
さりて是の心とけり  
子規  
郭とてその心とけり  
現くさりて物言の子規

今 塊首  
長馬  
志郷  
今 玉層  
梅剛  
今 梅堂  
蕉丸  
蕉白

本草茂

梅の美小町うきよきれり  
りつや人も来り居る志氣  
島山此志とて心とけり

抄

菊房  
疎夢  
星布

木下周

木も夢にうきよきれり  
湯泉泉ふに到て是れ名も  
下言や梅の心とけり  
彫の子とれぬ心木下言  
下言に壬生此小様、解か  
おれくと人かよくと木下言  
下言や物のありと小言原  
何れ中の様とて木下言

女

星鹿  
道亮  
白旗  
袂昌  
一醒  
然り日  
乃亮  
今

題叢夏



常盤木原系

綱みはよし志ちはねや木下言  
碑を杖ていろふや木下言  
常盤木の茂るいふて静く  
楠らるや七つやりの虫物よ  
とふけ木の火とらるる茂る  
松らるや大河にうつる松根のと  
多ふ可笑し松の葉茂る後の上  
及中へ飛遠出て松をたら  
おふとん出て掃井の茂るよ  
色に黒に相控して花を以  
人やそととせ余や桐の花

宗 貨僕  
下路 斗固  
陸奥 乙二  
陸奥 李光  
書 藤史  
護物 院人  
保吉 院甚

柚の花

おのれは木の玉の井さへ相のふ  
花咲ぬ七度切し相の本に  
年の流し小禮に花より相の花  
石と枝は貴いさなる花柚か  
先小柄登りてその厚ふ柚か  
花柚らるう久て屋の蓋か  
狭うと途系を憶るふ柚か  
柚の花を麗目に来たり玉子買  
柚の花に乾く雲に花を  
柚の花やひらう咲てもまの敷  
柚の花の息も厚むう勢の妻

合 路人  
越後 松魚  
今 院老  
白 院心  
上原 白老  
陸奥 院仙  
北 院袋  
女 院

題載度



喜山椒

白ひさる喜山椒下木の葉

加賀

正寄

根穀花

赤鴨木に根穀の木のこぼれ

陸奥

志順

柳花

柳花より平端花の心家集

江戸

改二

何事の数にむろろ柳花

美崎

葉庭にそよひたり柳花

柳堂

枕の木の葉をこぼして平柳花

奇劇

尻柳の葉ぶくふと来たり

一茶

村のふろろと巻と柳花

漫こ

尻村やありたすそよひのふり

可布

麦飯のうろろ白く柳花

左節

小丁より平端花ありて

壺中

繡毬花

白丁花

さよひの葉や四角に白丁花

尾張

一玲

玉の葉はほろろ成し白丁花

武蔵

班象

義棧

世の中にさよひの葉の棧

馬逸

檜桐花

あつたす檜桐や四角に花

五郎

志ゆら花をこぼして花

美九

不返言風吹き入りしゆら

乃亮

花茄子

あすもせん初花茄子

岳路

花茄子はれらも聖三のひら

貞佐

初茄子

うろろあつたす葉の葉初茄子

吐白

京へ出て秤にうれ初茄子

壽七

初茄子はれら色うろろ



菰子

一草  
 後物  
 代書  
 又成  
 長翠  
 成員  
 甚牛  
 甚村  
 甚老  
 成甚

一草  
 後物  
 代書  
 又成  
 長翠  
 成員  
 甚牛  
 甚村  
 甚老  
 成甚

筍

保岩  
 重厚  
 又成  
 存亞  
 寸素  
 士切  
 今  
 柱不  
 恒丸  
 少履  
 成員

竹の子は枝は通すそたのり  
 たけのこはれをくもおのり  
 竹の子は枝は通すそたのり  
 竹の子はれをくもおのり  
 竹の子はれをくもおのり  
 竹の子はれをくもおのり  
 竹の子はれをくもおのり  
 竹の子はれをくもおのり  
 竹の子はれをくもおのり  
 竹の子はれをくもおのり  
 竹の子はれをくもおのり

題叢夏







落

莢

舟の花のそらくく 落の唐草の  
 落の草を底にのんでおの白  
 一のりやきんをくくは莢の白  
 漏れおの白も焼し 莢の赤  
 小折て坊めくちや莢の赤  
 訥く虫をとりたり 唐の莢  
 莢つらひ一掃りくちを莢か  
 ちを吹き雀の赤くは莢の白  
 唐壺へ葉刈入ん作くちを  
 松の葉に下後つく風 蜀 莢  
 唐壺のよりのふくく 公

郭  
公

郭公の唐の初言そ根を  
 子規此九日もり安か  
 ひれぬき文のきうれつち  
 郭公の唐の初言そ根を  
 夷山や花ちるうた杜宇  
 弓とりは弓持てま杜宇  
 起郭のこのおはぬ郭公  
 不れ陶登の唐も唐か  
 周燕唐の唐の唐の唐に  
 初言を唐にきく唐の唐  
 信女衣の唐葉た唐の子規

○世二

莢 恩軒  
 莢 莢  
 公 乃 莢  
 公 莢 迪  
 長 白  
 唐 翁  
 悠 心  
 標 気  
 也 有

公 莢 左  
 公 周 東  
 公 包 権  
 公 曉 甚  
 公 公  
 莢 村

題止義良











子規竹やうふ世の心の中  
子規花風よりうきまの家の  
名こそいれしてえぬ心持  
この節を人もまらん子規  
ちりくといふを打上り時  
まやまのま本よりうき子規  
短おとすも短し部  
子規まらん下路ハちりり  
ついでに竹日ありし子規  
松折も婿さうし部  
瘦骨丸肉喰ひにまらん子規

左琴  
木僊  
道隣  
成員  
会  
会  
喜年  
完来  
会  
柳也  
浪

子規ちりぬ心とまぬりせ  
君う代のやうしうれや子規  
時を打ひに控ふるまやん  
子規天の川風打とれぬ  
竹をちりり日ありし  
まらん心よりまんと部  
まらん心や井の竹  
竹を打ひにえぬを打  
竹ハ人にまらん心  
地よりて竹てまんと時  
おとすのくまらん心

宗志  
鬼子  
車大  
祥来  
善成  
会  
会  
可教里  
会  
会  
善之

題叢夏



花のそへ肌に限あり時  
 其を平居のいさく子規  
 子規啼て江上敷華を  
 小笹生もあつじ次ハ子規  
 ちる白に位つけり子規  
 いちさくいけりたて子規  
 吟道は初言あつじ子規  
 之を吟あを巻とや歌  
 羽をよじにちけり子規  
 子規一人一時ハ打りて  
 女 廣原  
 其成  
 吾雀  
 乙裳  
 一折  
 巨剛  
 斗入  
 似藤  
 洪  
 李友  
 孔繁

旭花家のいさく子規  
 戸明けハ白の霞のさる子規  
 猫の目も曇りてさる子規  
 ちる白に位つけり子規  
 松籟の流とちる子規  
 ぬれ毛のあつた子規  
 咲つてさく子規  
 枝のさる平見も巻藤竹  
 ちる花の面もさる子規  
 子規曰りけりてさる子規  
 葉を黄てさる子規  
 女 廣原  
 其成  
 吾雀  
 乙裳  
 一折  
 巨剛  
 斗入  
 似藤  
 洪  
 李友  
 孔繁

題葉真



葉 標

葉標やまのむらさきもまたより  
葉標に風のつらさを忘るり  
葉標や世にまう人の世ありは白  
葉標やえじもやまぬ人  
葉標の火をすくや池の上  
葉標や牛のふらしたる片の家  
葉標はたかひ色の標水  
葉標の氣ハ平のに流れより  
葉とつて陸を標の上をり  
葉とこれハタの標葉の風を  
葉標や果の標の喰ひ

戸 一 雲  
戸 一 雲  
戸 一 雲  
戸 一 雲  
戸 一 雲  
戸 一 雲  
戸 一 雲  
戸 一 雲  
戸 一 雲  
戸 一 雲

夷 標

性て胸のほろもあしる規  
鳴りてあしるをわらわ規  
まの年のむらさきもあしる規  
海へゆく瘴のむらさきもあしる規  
よるくの夷をむらさきもあしる規  
形より瘴よりむらさきもあしる規  
流ありまのむらさきもあしる規  
木のむらさきもあしる規  
標より人のむらさきもあしる規  
葉とこれと書きてはむらさきもあしる規  
時をえたりむらさきもあしる規

電 燈  
今  
今  
今  
今  
今  
今  
今  
今  
今  
今



吟時を打つ藤堂は子規  
吟まひとあはれあし時を  
子規多て多るふの一首か  
夕る此をよしのひて子規  
子と本も眼にうしむ時子規  
子規うくと打つ人の友の元  
出ていけいんまゝおれ子規  
部々人ハ多しあはれなり  
子規世へくるといふなり  
子規人ハ多しあはれなり  
走らやあはれを打つ子規

武陵  
松花  
季育  
嵐外  
全  
馬仙  
三人  
護物  
志半  
梅阿

吟の歌う見ゆるやうの時を  
子規秋もも似つるあはれなり  
時を打つ人の下やうの歌の心  
横むらあはれその初音の子規  
岸よりをそなたにたり子規  
まゝ一掃しと子規と手  
朝りの元はちれし子規  
おらむらとをたうの答へ子規  
子規りあはれよとあ人のと  
岸にまゝのやうに部々  
子規あはれを打つ子規

左  
井肩  
其裳  
万和  
女  
全  
方明  
立志  
漫  
居然  
扶筆



子規危の中一に鳥二ツ  
 昼の戸をこしてをれか子規  
 花のちるに似たり花を食む子規  
 鳥子を望みれをを望む子規  
 夜の下をにをの尖る子規  
 ひしよりまのふくして子規  
 この中をこせを籠るし時を  
 子規をのころれにけりか  
 子規をに七千入りあり  
 時を清れあり人床し  
 子規星を遊の書うたり

佐藤 麦二  
 壺伯  
 系 其成  
 鶴鳴  
 湖中  
 大和 後也  
 樹翠  
 芥河  
 菊也  
 白考  
 浪不 鷲雪

子規海山に身をひつか  
 子規短く打よ小一年  
 身をあまるといふあれと子規  
 子規飛居とくしにをるやれ  
 休しとあらしりぬ子規  
 子規たのこハをれりり  
 子規鳴下江と樹をさ  
 子規をを刺しをれぬれ  
 ありしとをちやぬと子規  
 時を初言にたぬり知れ  
 子規二をり中れこのあり

筑山 双鳥  
 去阮  
 不特  
 百非  
 仙風  
 梅園  
 孤心  
 揚子 其圭  
 石波 去芳  
 重約  
 出子 橋丸



























葭 割

上りかきやそ刈苗も表ハふらん  
 上りかきやそ刈苗も表ハふらん  
 上りかきやそ刈苗も表ハふらん  
 上りかきやそ刈苗も表ハふらん  
 上りかきやそ刈苗も表ハふらん  
 上りかきやそ刈苗も表ハふらん  
 上りかきやそ刈苗も表ハふらん  
 上りかきやそ刈苗も表ハふらん  
 上りかきやそ刈苗も表ハふらん  
 上りかきやそ刈苗も表ハふらん

保吉  
 保吉  
 保吉  
 保吉  
 保吉  
 保吉  
 保吉  
 保吉  
 保吉  
 保吉  
 保吉

鷹 入 村

蒼 鷲

鷹に赤うし白にたれさる城庭  
 鷹に赤うし白にたれさる城庭  
 鷹に赤うし白にたれさる城庭  
 鷹に赤うし白にたれさる城庭  
 鷹に赤うし白にたれさる城庭  
 鷹に赤うし白にたれさる城庭  
 鷹に赤うし白にたれさる城庭  
 鷹に赤うし白にたれさる城庭  
 鷹に赤うし白にたれさる城庭  
 鷹に赤うし白にたれさる城庭  
 鷹に赤うし白にたれさる城庭

宗漢  
 宗漢  
 宗漢  
 宗漢  
 宗漢  
 宗漢  
 宗漢  
 宗漢  
 宗漢  
 宗漢  
 宗漢

枝 垣

暮

蚯 蚓 出

蚕 蛹

枝垣のそとふりしつゝわ  
 枝垣のそとふりしつゝわ  
 枝垣のそとふりしつゝわ  
 枝垣のそとふりしつゝわ  
 枝垣のそとふりしつゝわ  
 枝垣のそとふりしつゝわ  
 枝垣のそとふりしつゝわ  
 枝垣のそとふりしつゝわ  
 枝垣のそとふりしつゝわ  
 枝垣のそとふりしつゝわ  
 枝垣のそとふりしつゝわ

吳吉  
 吳吉  
 吳吉  
 吳吉  
 吳吉  
 吳吉  
 吳吉  
 吳吉  
 吳吉  
 吳吉  
 吳吉

題 兼 夏



子  
子

ほろろりやひしし流らる流  
子この力にさよる小塚か  
子こや改にさよるその字況  
子この世をさよるいさろりり  
子こい浮てみるの静ろり  
子こやと居くしとさよるの教  
夕立の雨を接るやろりり  
秋先に来てさよるさよる  
よりあへん葉をさよるの塚か  
さよるの飛塚かまの塚か  
川裂て接るさよるの塚か

蝶  
希言  
三付人  
一方  
魯自  
席睡  
吉成  
旋剛  
百地  
尺文

水  
馬  
飛  
蟻

端  
致  
牛  
鹿

窓に供へられさよるの塚  
舞くやろりりさよるの塚  
たのめさよるさよるの塚  
あろりりさよるさよるの塚  
端生やその角又さよるの塚  
さよるさよるさよるの塚  
端牛さよるさよるの塚  
さよるさよるの塚のさよる  
あろりりさよるの塚のさよる  
家に向て何れ用さよるの塚  
牛塚にさよるさよるの塚

右旋  
岳耳  
曉甚  
麓左  
荻村  
公  
白旋  
百川  
大江丸  
又  
秋瓜

願  
最  
夏







てくまをりたてられて嬉しい  
小言してふの尻にりぬ角牛  
角牛を尻たの尻もまけり  
干葉ももくきりあり角牛  
角ふらへきにむきりりり  
尻たけの尻のやすけやるりり  
とふまにへんて尻たけりりり  
またれに角ふらへりりりり  
柴折しりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりり  
遠生のりりりりりりりりり

快甚  
文角  
有斐  
南溟  
左文  
去思  
足亮  
伊勢  
風也  
李奈  
ト

油 燧

葉すりのやもつれくの角牛  
折れりりりりりりりりり  
赤世とも斯う送らたりりり  
まその市もももももももも  
後たははりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりり  
己うけ尻たけりりりりりり  
何とてふりりりりりりりり  
るりりりりりりりりりりり  
折れたらば尻たけりりりり  
抄のなれ尻たけりりりりり

古亮  
支白  
李尺  
は柱  
下口  
可竹  
可遠  
南皮  
文角  
栗前  
旭如

題叢夏



枕元鏡

おろく巳鏡にのほろや竿の先  
いととまきんもあつらふめく巳  
蛇の元鏡よりし 羨るれ

何藤如  
下島

花  
求一  
曉甚

俳諧書白歌叢夏中

桂丘左節一輯

五月

緑毛龜の道にまゝ又りか  
一りたるに名をなれ又りか  
夕白の朧まつたふりか  
水子ハ花の葉の又りか  
猿にハ越られ又りか  
深心木の底に水ナ心舞りか  
り先におれ控てあふりか  
年のたふと鳴り又りか 雲馬  
杞まくのふ又りか 八毛花

但

白権  
松尾  
士郎  
升六  
若三  
常笠  
三原人  
菊也  
芙蓉

題叢夏



尊像

その名を冠せしむるは  
み水のちやちと煮つ旬は  
竹撮やこく切れちやち  
胸雀にちやち見せしち  
親の手に小浪のちやち  
戸明れはちの親はち  
溢一を入るとはち  
山越に紅を押しち  
花はちくもはち  
信てはち穴をち  
ちやちと入りはち

下段  
梅史  
薨左  
長翠  
榮五  
吉成  
乙二  
一平  
奇岡  
素榮  
魯隱  
申高

〇五一

尊像

旅人の笠にやちやち  
かりてめて切るはち  
るれははくくのち  
短少を擲て持ちち  
白雪のちちちち  
襟うらもはち  
世の中をちちち  
引分てしちち  
ちと脈にちち  
川中れ初はち  
花美のちち

電境  
亞後  
井肩  
志宇  
外海  
要介  
石鏡  
智酸  
白境  
刀居  
蕉白

題叢







言高刀

君の代のたけしに高や高刀か  
はく高刀まはああるり教か

秋

見推

秀高寺

君の代や下地すれて高か  
君の代や下地すれて高か

保吉

系

系まの下の下や高に高すし  
系まの下の下や高に高すし

下中

景桂

印地寺

弦をうゝ親の心そ下地寺  
煉子て流されたり又り力

貞佐

百煉鏡

すし下や男の屋く造 標  
そのれやや標をほくおの交

白権

保吉

成吉

隆石

士成

全

吉成

成貞

乙二

茶丸

菊也

題叢夏

いより大粒ももたれ系湯か  
又り白に粒し見たるを粒か  
美を此湯ももたれ系 粒  
は取やひりかたれ系 粒  
妹 はんいりもほく粒か  
筆粒一り粒の心地すし  
白漏に垂るるをたり系 粒  
投出て見たる系を 粒  
筆色あるこの下粒の粒使  
壹粒乳母のなりめ身たる下  
度りして来たかさうく 粒



拍餅

粒粒ふんもろりし十園子  
馳走あつ子あつあつおれ粒小  
久粒米の抱ひに好まら  
石女のむさくさつや拍餅  
懐兄や懐母のまきあり  
源氏画や武末の懐糸の糸  
ささくし又りさたる懐竿  
ゆゆくとあに足てり懐小  
まろめ子規さくの居り小  
君代の佳味方り懐小  
板りの是も久しきの居り小

旦  
林同  
女  
演藤  
藁山  
柳丸  
保吉  
不  
其  
井  
木  
鹿  
尾

胡掛兜

又りさし懐て懐の元か  
桐瓶の縁やれさるの居り小  
白を懐て北の懐り小  
余はの子の居りほる松の中  
掃掃々来てさるる懐  
降白の中れさる初懐  
さる懐致あつさる世か  
世世と古さもさる兜り小  
さるさるしるるさる兜り小  
百子下足さるる忘る  
戸火費て茶障やと行にさる

魯  
其  
止  
大  
有  
周  
披  
子  
又  
虎

題叢表







石巻藩

花且見

美蕨川

蓬春梨

むすまに石巻印ふす丸水

石巻や隣の元も兼使時

石巻をよまうまうして屋の流

石巻やわのれも水もいそよま

うらゐる平かつし張りし夏具是

世のあやめやけりりふさうそ

流へるぬ里のふさうそふさうそ

瘦うの根こそや喰わねん

鶴の足堂れあや美蕨川

美蕨川 耳の流すの水声

よここしとやあは蓬の美をか

蝶美

若松

三層人

年々

咲草

白桃

護物

李基

也有

野牛

丁度

蓬浮草

蓬

浮蓬に魚やんをちりり

池の蓬を葉浮草の風情水

花ハハ風登てり水蓬り水

蓬咲ていやはきあはけりり

月け入やは葉を葉蓬見舟

白蓬に人けりりあけりり

吹草の葉を風に揺る蓬見水

日元中や蓬の葉を風の風

葉餅うら葉はあはけりり

咲うとくふれりりや蓬の花

白蓬に夕暮を流るあけりり

犯子

左

周更

夕餅

儿董

薺左

薺村

花縣

蝶美

月明

白桃

題畫長



人たし蓮のうへりこるる  
公蓮のちやいさきそり  
白蓮に傘をさしむる  
村白ハハとより蓮の花  
あつたきまの蓮の花  
屋成る方のそと蓮の花  
心本やかま蓮のちり  
うつらいにをうはす蓮  
柳の葉の枝はより蓮の花  
いと水の中をより蓮  
蓮の良に女陸子より

内以

宗 誤  
昌 昭  
保 吉  
斗 入  
士 飲  
全 丸  
全 丸  
全 丸  
標 雲  
全 河  
成 英

蓮のよみや答ふまのり  
白の蓮をと一様に雨を  
飛燕にさすきとをより蓮の  
あつたきまの蓮の花  
大くの蓮のあまきく  
新緑やう一の足はや蓮の花  
新緑あつたきまの蓮  
はつたきまの蓮の  
転白の中はより蓮の家  
風をちりかき蓮の  
丘の家や蓮に吹かす

龍

完 素  
少 飛  
年 心  
高 云  
一 草  
左 荒  
全 丸  
全 丸  
全 丸  
全 丸  
全 丸



藤花

白蓮のそのたふさめそふりか  
公蓮や根ぶの干らけつるはれ  
蝶をにちさるれやれ蓮の花  
かやれ泪こころむ蓮の花  
蓮とも笑てあより外はあじ  
白蓮の一場咲ぬ稿の中  
藤よりへと枕をれり蓮の花  
蓮のまやあうつじてはあさる  
藤の花やけりまをれりよす心  
乃田の刈藤花をよるは白  
その花やあうれたれ風さる

耕翠  
沙生  
寿翁  
釣翁  
白老  
東瑛  
藤花  
夢麻  
夢村  
合  
白推

題叢夏

その花に吸まをる人松子か  
その花やリリりりりりりり  
引及やば藤の花のさるまを  
心より押さるりりりりりり  
その花に夕風そよと起りりり  
その花に抱くかかかかかか  
その花やさくらかきりりりり  
此れ花やまぬりたれと清地ん  
よここ花もにむむむむむむ  
村言やば藤花あく花ひらく  
その花を咲か咲たり藤根の子

系更  
悦甚  
際美  
悠言  
兼波  
白芥  
乃亮  
合  
一草  
管老



岸

水に流れて既に浮塵花を  
その花や水のさかみを咲乱す  
まの気や風さうくも足しあはし  
岸や岸力の押へても  
岸にうれ子持入行  
岸水巻久しや子殿所  
岸やお前 嵐のうき根  
岸に童をさし世をさか  
川ありて岸に身をまかせ  
岸と川にたて花を小舟  
岸にりりりりの夏川

鶴 瑞馬 冠 啄  
女 子 代  
百 代  
白 桃  
保 吉  
重 厚  
斗 入  
蹴 六

〇五九

岸に流れて既に浮塵花を  
その花や水のさかみを咲乱す  
まの気や風さうくも足しあはし  
岸や岸力の押へても  
岸にうれ子持入行  
岸水巻久しや子殿所  
岸やお前 嵐のうき根  
岸に童をさし世をさか  
川ありて岸に身をまかせ  
岸と川にたて花を小舟  
岸にりりりりの夏川

進 日  
長 翠  
寺 岡  
一 葉  
重 厚  
斗 入  
蹴 六

願 叢 天



菅草  
花

菅草やこれ子供の是の草と  
席大花も足ぬるありし水  
岸やひさしり水の案内し  
岸をこへてわきく鳥の風  
村白や豆ハれるそはの草  
是指し様の故中や菅の花  
菅生ぬる草花咲ぬ草持ぬ  
灯も十草生し人を菅のふ  
笠をきて十りこり菅の花  
ひやくと風もやうの菅の花  
ありてあるじたり菅の花

栗大  
て  
起石  
不願  
子衆  
薙岩  
士郎  
合  
洪六  
妻甚  
乙二

菅の花人かろりうわねひさし  
梳人の現すに来りや菅の花  
冬の来てさきうしより菅の花  
白雲の流や先へこけれ花  
跡木の陸鳴なり菅の花  
庭の菅花さくすも忘るぬ  
吹くともいふらん菅の花  
膝の奥に咲り菅の花  
松風の院に咲れ菅の花  
たのしみはあやわさし菅の花  
花さるは菅さくすらん草の来

亞淡  
葵亭  
松堂  
奇則  
蕉白  
一菜  
氏陵  
三舟人  
志守  
梅川  
尾張  
徳雲

題菅草



百合

雪のうけもすくくと若の花  
水香を夏風懐あり百合心  
山ゆりや若くは雪露の立派  
山ゆりや齒染の房よりついで  
ゆり花のこれをとほは山路か  
ゆり咲て水中央の清き池あり  
梳篦やのゆりうらつく天香か  
さくゆりの雪のそまを伏流か  
百舌をきくおきき花鳴る人に  
まどくたのうきまをゆり花  
谷をたふして誠いゆり花

推己  
女子代  
薔左  
白梅  
士郎  
棠兆  
成貞  
左亮  
全  
奇閑  
素迪

紅藍花

赤ゆりや口明てある里のや  
暑がたりや若くはこれ花の色  
男はなつとせよまのふのふ  
ありり花をまつりも花の色  
五つむや赤に地の界るうら  
五花つむうしる花をまつり  
忘草の花ハこゝも咲きあり  
久風に交忘草よりふたり  
足指うらやあつと忘草  
菖の株の葉を咲ぬけふ家  
志もつけやの紅藍花の色

寛松  
女子代  
石嗽  
其若  
丈方  
尺文  
系更  
猿左  
可起里  
魚文  
吉岸

忘草

萱草  
下毛花

題並夏











花子の一本梅にとけり  
を  
渇水

かきこはけのふそ雀の子  
元  
素月

花子を登られたりとさき  
尾  
輪之

花子に鼻つぎつけて是様か  
伊  
尺翠

花子にさけうりしと強か  
尾  
望山

扇まて花子を境に在り  
、  
碓大

岩交や晴天りてとまり川  
芳  
成

岩交を家前ちうら垣見  
東  
陽

花をくや花もうこは是の隣  
淡  
英

花前も梅釣子の志りか  
寺  
免心

鹿よりその子をたれたり  
江  
笠原

石竹

梅釣子

馬齒莧

酢漿草

芍薬

葛草

藜

時計草

菅草

十葉花

一ツ葉

覆盆子

るはは花るふとかり  
乙  
二

りこは花のありも来にり  
今

るは花のありも来にり  
道  
亮

了る花のありも来にり  
素  
卿

和手のたうらと花の  
書  
丈

松風の藜より多くと  
犯  
文

落つた花のふらと土圭草  
對  
花  
暁

をたのみのふらと花の  
道  
亮

どくたふや花のふらと  
芳  
笠

一ツ葉のふらと花のふら  
道  
亮

若川下いちどとるの及ら  
柳  
居

題叢夏



棠 桑 藤 青  
胡 実 実 梅

心路の杖に片たりつら  
若くは旅人若ていと  
西の空に淡く棠の  
棠の実に片積り  
夏の実や杉の  
若くは梅に  
梅に眉あつ  
梅熟は折に  
若くは梅  
若くは梅

棠 桑 藤 青  
胡 実 実 梅

南天 花

棠 花

南天の花のこ  
南天の花のこ  
南天の花のこ  
南天の花のこ  
南天の花のこ  
南天の花のこ  
南天の花のこ  
南天の花のこ  
南天の花のこ  
南天の花のこ

南天 花  
棠 花

題 棠 花







花 檣

長白に遠記を子て必松栂  
花松栂干や口不枚麴子の  
先予り花栂に碑一泣凡  
栂个枕子身の栂人笑え  
栂や月夜とをれ六字せり  
栂の春山とをりてし  
栂のひくくへある白の  
良とをりや花栂の秋の坪  
栂や子も兄なる女有速  
栂や白灰のり大壺とる  
やうしの栂多き松く凡

三道人  
壺枝  
白栂  
保吉  
浙白  
乙二  
奇剛  
号笠  
竺高  
碓合  
米壳

檣

花栂をりて白の  
花栂の足さるるまり不栂  
村白や足り身なき花栂  
入りのそと咲や白も花栂  
屋の中一移立たり不栂  
心多の秋て人見とん不栂  
とう見ても夕暮るその必あり  
花栂をりの片羽のそふも来り  
心栂子の花よりくと咲にたり  
ふらふらの心知まのれ白ひたり  
ふらふらの花も癖もたうりたり

栂  
白栂  
甘谷  
月居  
乳阜  
枚枝  
星譜  
淳石  
尺蓮  
以是

題叢夏



くらやうの花やあはし婢女歌を  
 口やうの笑ころしり門の白  
 ころしやこれそとねふりもか  
 くらやうに一塵もつ花の歌  
 ぞうんて一舞越ぬ交木立  
 空にたつまのいふり交木立  
 酒十弦中ややや交木立  
 おの来ぬ子ぬあはれ交木立  
 交木立人のユミ坂の川  
 歌き自の甘き自のや交木立  
 交木立歌はらひさく来れり

護物  
 三唐人  
 三年  
 氷水  
 燒茶  
 薺右  
 茶右  
 白旗  
 百吹  
 不明  
 成英

題叢友

白壁にあけの帯や交木立  
 境のうたかくさしの交木立  
 斤つゝは海をりて交木立  
 席杖も是して是る交木立  
 いは来ても友の相ひそ交木立  
 人の足る暖さし交木立  
 是りや抱きこもる交木立  
 百姓の富をいひし交木立  
 万紀は歌や柁も交木立  
 川風やあかりたる交木立  
 交木立やいは男てりりか

陸奥

尺丈  
 道老  
 岳轆  
 三唐人  
 壺伯  
 井肩  
 都務  
 紀途  
 鳥夜  
 雜咏  
 何頼











田  
植

田一枚子巻にちりて雨にふる  
 老運のりり終るりちるれ巻  
 崎道やゆつりあふるる巻洋に  
 子巻舟履て巻の此来か  
 儀田のりりてんく子巻か  
 白巻の个子にちるる子巻か  
 子巻より巻のけりめし女まより  
 巻たたえに捲しもあふるる子巻か  
 松にりを訊ひてあふるる田植か  
 ひりてりりり巻田植笠  
 陰はるるあふるる田植の男の丸  
 木のりりや松をにちるる田植酒  
 銀やりにあふるる巻田植か  
 志れりりや田植丸の白の丸  
 一枚りりあふるる田植丸  
 植てきりり田を麻の海りりる  
 ころむりりる田植来り水田か  
 めりり星の敷を田植の巻を丸  
 心陰へ巻のりりる田植丸  
 巻れ子の田植美州の巻の巻  
 植巻るるりりるる巻丸  
 侍に巻るる丸るる田植丸

奇園  
 寛松  
 白塘  
 決舟  
 帆平  
 心阿  
 幽晴  
 素樸  
 葵左  
 今  
 白龍  
 尼諸丸  
 保吉  
 恒丸  
 士丸  
 今  
 今  
 全  
 芳之  
 樗也  
 巻成  
 巻之

願葉草



植つてり日よの田とせりあり  
 了やくと植て去りり田一枚  
 吸ふや田植の留まの故し言  
 いとせうの言そ田植の古歌  
 万千里のならん田植りれ  
 うくそてし淋さるる田か  
 發萩のぬれたる田の田植か  
 人もり植て見たる田か  
 田を植て風の戸に集りたり  
 丁々の言にそえて田植か  
 り合はれとせり田植人

大阜  
 道亮  
 全  
 等亮  
 奇園  
 魯隱  
 蕉白  
 武陵  
 考公  
 長高  
 座来

道端へ勢も来てはる田植か  
 戸にそく植てたのさ田植か  
 松うけと来てり田植か  
 帆の元はそそき田植か  
 浦に磯さくそ田の田植か  
 田を植て流もきおん田か  
 田を植て志す平流の田か  
 よりかりにそり合のつ田植か  
 松風たしるに松よ田植か  
 山法十人そりそ田植か  
 園に灯のともるそ田植か

横巻  
 卓池  
 釣翁  
 山人  
 其柳  
 郁契  
 木容  
 丘徳  
 又雀  
 寛右  
 悠吉

機叢夏  
 機叢夏

田植唄



麦田

夕暮の光ふらふに田植  
夕子て於植さる田明  
極して只一枚の麦田  
傘としてふれに於田  
中りてりり八道ある  
凡そもくは田にこり  
跨りも人も残りて  
約もて信了樂訊  
ふ家こよとれ  
大切の於  
ゆへ人もも

足直  
無隠  
左明  
尺棧  
百明  
一草  
大阜  
有居  
全  
源

田子取  
子乙女

松風やうさうさたて  
松明の火を携へて  
秋の古田ハ  
大さうれ植木  
火を焚て  
打よこ  
中川に  
よるよる  
まの  
まのい  
子乙女の

松花  
号笠  
一葉  
白塘  
花陶  
桑  
梅  
吳光  
燦  
薨  
尺棧

題



蟬初音

危の子をせむらふつ凡桂女か  
田桂女のころひてけり扇ひり  
り扇ひ子乙女やうとそんけか  
田桂女嫁に松をさすもり  
子乙女に松をさすもり  
子乙女に松の虫もそんけし  
水子所子と女とまつもか  
子乙女や著にけりもそんけ  
子乙女の笠やうと松を柳陰  
子乙女や登れまゝとけり  
初音や脱履ぬれかてり

公  
覽甚  
保吉  
大に凡  
養凡  
石亮  
月居  
一葉  
松葉  
又切  
又切

蟬

初音やけりんこのや蟬  
初音や立家うと花うらら  
初音や又著のまかそんけ中  
初音のうららとけりわり水  
初音やけりんこのや蟬  
初音やけりんこのや蟬  
凡そ凡蟬に吸れて一本水  
初音のまじりあうか宛ぬ下  
子ろりい定かんとそんけ  
すりの果と板や蟬のま  
初音やけりんこのや蟬

凡鳥  
梅河  
寛松  
梅覽  
其明  
李華  
鳥群  
覽甚  
凡董  
葉あ  
蟬美

題董友



松の木やん六粒うう蜂の鳴  
蜂の鳴て魚送りやう縄まわ  
鳴蜂や浮世を風うう様の本  
鳴やめは鳴蜂死んで足きんう  
夕やけのやいや花松の蜂のあ  
鳴中にすうう蜂のひらうか  
蜂のひらう蜂うう木陰うれ  
蜂にきてううううう蜂のあ  
蜂のあう翁にうけうううう  
蜂うううううううううう  
人うう蜂うううううううう

○七五  
白権  
保吉  
斗入  
存臣  
祐男  
又角  
士郎  
三歡  
考を  
成員

ううううの蜂を浮世にこの家  
蜂うううううううううう  
蜂うううや井戸有りなり世にあら  
蜂ううううううううううのあ  
をむいて不巧もや蜂の飛り  
や蜂のうううううううう  
母やむ木陰の里うううの蜂  
蜂ううううううううううう  
蜂ううううううううううう  
葉をうううううううううの蜂  
蜂ううう木もたううううう

今  
祥永  
可教  
今  
葉  
今  
葉  
道光  
今  
月  
考







坂

氣のうつる木もかたすうに輝のつ  
古井戸や坂にさゝぬの言さし  
上風に坂の流りしおし川が  
まはつし起て坂を焼く鳥  
あつてさやぶさ坂も書もあ  
作伐て坂のあきさきより  
さし入や人をさす坂の心  
玉の結れとや焼れて坂か  
坂の中へ松をさすく日あ  
くし田やの坂にさすく伊  
坂のつとをのれくさるる

左 竹  
右 杉  
今 松  
几 葦  
二 柳  
尺 檜  
保 吉  
南 明  
岱 喜  
大 江  
松 尾

〇七五

題義

坂のりや碑人の是に記りさし  
坂の中へ松をさすく日あ  
坂の心結れとや焼れて坂か  
坂のつとをのれくさるる  
さし入や人をさす坂の心  
玉の結れとや焼れて坂か  
坂の中へ松をさすく伊  
坂のつとをのれくさるる  
さし入や人をさす坂の心  
玉の結れとや焼れて坂か  
坂の中へ松をさすく日あ  
坂のつとをのれくさるる

士 松  
右 杉  
今 松  
几 葦  
二 柳  
尺 檜  
保 吉  
南 明  
岱 喜  
大 江  
松 尾



坂  
柎

坂のたふちをさるる者の海をしま  
 坂のつらにさるる柎をたふち  
 坂の城のま層のりの敷坂の  
 坂の坂やまより起る者のを  
 坂の坂やまより起る者のを  
 坂の坂にま柎をたふちもつら  
 坂にたふちりやまより起る  
 坂の坂やまより起る者のを  
 坂の坂に酒次て坂をたふち  
 坂の坂をたふち柎をたふち  
 坂の坂をたふち柎をたふち  
 坂の坂をたふち柎をたふち

真こ  
 長高  
 一茶  
 平角  
 三層人  
 石津  
 五老  
 杜厚  
 可為  
 養嫁  
 無底  
 春來  
 吉良  
 右第  
 院甚  
 蕉百  
 霜操  
 牧童  
 一茶  
 赤芽  
 由之

〇七八



坂を火

坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か

筑  
魯白  
耳考  
保吉  
今  
松石  
外六  
榮兆  
世子

〇七九

題兼夏

世の事あるは心のあれたも坂を火  
本さけけに白を中いなる坂を火  
考けうすりのけりて坂を火  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か  
坂を火の橋の末に巧坂か

成英  
ノ旦  
午人  
又枝  
可劫星  
高三  
不寒  
魂蘇  
武陵  
号笠  
申高



故の事しむる事いかに揚水  
 奔りの坂をたてて風くもるか  
 とくそ風が湫の柄息に坂をた  
 起されても傳ふ秋の坂をた  
 十又夜の月もしし坂をた  
 きこのまにやうに坂をた  
 坂を火や布のあたるも人の位  
 きとん 花の枯枝を坂をた  
 うがそのまをた返る坂をた  
 月れ雨のりりりりりりり  
 春中平むに坂をた坂をた

一茶  
 魯隱  
 秋夫  
 憐霞  
 夜來  
 柿園  
 鬼洞  
 而辰  
 其吹  
 天  
 恒丸

管

管火やすの管やうね橋の葉  
 管賣すしの吹中葉りりりり  
 葉のうへ吹くははのりり  
 追れつらんうへははのりり  
 物元の神の葉はははははは  
 花や管葉人を訪ふ葉の葉  
 むら松や清んとうへりりり  
 やあつて清んをさうへははは  
 出逢ふて清んをさうへははは  
 之れくや葉の葉ははははは  
 月れ雨のりりりりりりり

柳尻  
 管葉  
 瓜  
 葉右  
 花お  
 白橋  
 瓜  
 葉更  
 瓜  
 保吉  
 吉葉

題義夏



久き管を管ひらくに定めたり  
来ぬをうたき蕨のたふかに呼吸  
をきくこけりて踊るぬ管り  
隙間の口又天かふる管り  
抱女とものはらうとを来管  
傘に巻いて度るはるる  
藤原ともうて度るはるる  
吹風の松を驚くはるる  
ちる量菴の花の風はるる  
布下袴のふつるる  
ふりもあうて志つるる

白  
又  
感  
斗  
梅  
花  
丸  
長  
南  
士  
成  
文  
完  
喜  
希  
可  
心  
泥  
非

吾れもや大井系とり  
之れまのれいそいそも管来  
を足るる心のきききき  
管々に清ると足るる  
濁定の有し足るる  
吹くよのきも持るる  
心の管笛ふく良き  
凡そはるるぬ管をす  
牙につくとおふた  
帯おて子に管と  
織姫の袴はるる

心  
泥  
非  
可  
希  
喜  
完  
文  
成  
士  
南  
長  
花  
丸  
斗  
梅  
感  
又  
白











鷹子化雲 夏蝶 恠子 恠壳 恠  
 ありあけの秋のよのいへる屋の  
 水音のあけの音にふれ居る  
 土縄のあけの音の居る水  
 とのそらに雲にちるるてあらし  
 舟の上にかりりり文の掬  
 り人のあけをききよや文の掬  
 恠の子平糸引習ふ所の松  
 夕風にふれあけりり袋掬  
 夕暮や縄を恠の眼の光  
 花時、縄よりあけしるるれり  
 縄はよふを古々にそそあ  
 今 箕山 草堂 左節 三馬 表哉 李石 伊賀 大和 伊藤 至江 麦左 舟木

雲信り縄をちちあ観りれ  
 いつした上まにりりあ縄をま  
 縄掬し人の光をままらり  
 罌ろしあをそそあ縄や皮の皮  
 神の縄人の袂まらりりり  
 檜葉の神も縄のちりりり  
 力あそそあや尺さるる良に縄  
 縄うちハ糸を上まにちりりり  
 縄道ハ糸掬をすたる糸か  
 松陰や縄にりりたる核 此立  
 粥嘗てあそそあ縄の葉か  
 今 剪左 雙甚 几童 代甚 長翠 送隣 一草 尺艾 核串 月化



編  
蝠

子のまや世の中よしと塊まき  
 塊まきつめつらひてまふんか  
 棋の卒やまふ人ありて塊の死  
 葉まの塊まふ氣や羞くし  
 赤ままふ人と打まふ奔の塊  
 おもひにもまふ塊のつめりか  
 沖中やけとまふよとまふの塊  
 編蝠やひりしの家のか  
 うらりやひりかまふとまふま  
 編蝠やひりまふのまふまふ  
 編蝠やひりまふのまふまふ

一茶  
 雪焼  
 小元  
 葵言  
 秋長  
 有奇  
 立志  
 葵古  
 晚暮  
 益村  
 保吉

〇八五

題  
出  
最  
夏

編蝠や改巻とまふまふ立てり  
 改巻を改巻とまふまふ打まへし  
 編蝠やまふ世ハ雀り号  
 編蝠やまふとまふて人たふり  
 橋のまふと編蝠に喰れまふり  
 編蝠の拵え料れまふ風  
 まふりく編蝠の世まふりま  
 編蝠の氣をまふまふりまふか  
 編蝠やまふのれくまふまふら  
 編蝠の拵の拵古にまふまふり  
 編蝠やまふの拵れまふ編蝠まふ

凡諸凡  
 葛之  
 茶野  
 白記  
 一草  
 道亮  
 一茶  
 塊翁  
 井肩  
 晚翠  
 美沙支











打の書に自ら居あてら野か  
とんちやあ明て藪の帯くれ  
星ハ輝てあふもししらぬさる  
弥子らのちうとを星のさみさか  
ふんちや星の酒をハ輝てりり  
心直ち家の東や鳴くさ  
やうさふに小くさう言れさ  
凡そあつくされさてさ鳴さ  
まき柳もさうさうや鳴さ  
岸のあてさしはさるさ  
さるさのさひさひさるさ

魯隱  
夢言  
月記  
羊角  
樵半  
蕉可  
井肩  
号笠  
護物  
三層人  
于蒙

〇八八

題叢夏

初もやはさるさるさるさ  
田のされさふさるさるさ  
有た川瀬ささるさるさ  
ふのさるささるさるさ  
田一板さるさるさるさ  
さふさるささるさるさ  
許やうさるさるさるさ  
家あれさるさるさるさ  
叩くさるささるさるさ  
乾葉さるささるさるさ  
鳴くさるささるさるさ

後  
乘犯  
釣翁  
掬  
永高  
標帆  
詠陶  
徐英  
應  
二  
確  
会



粉川

二つづつて思もるらねんさか  
まらんたつくさみちるのよさか  
阪ののくさみちるをいりり  
老たりのれんちれんちるせん  
まていさ白もるる粉の舞  
はなれ粉火火を言わねも泪か  
表の粉のうさそくやむ舞か  
糸通く粉のちる展る夜明け  
と川と湯くして下る粉かか  
赤や粉とのれたる魚泳し  
老やれ粉畑とくはんねんれ

子威  
今見  
春思  
古竹  
柳花  
咲甚  
系更  
夢左  
夢右  
公

粉の膏に魚より遊んば川か  
粉の粉に粉通なり九日登か  
多る衣のれにさく粉あか  
粉の歌の能てさくあきさ  
粉の狗は流るる岩のたかか  
一たかかたて月を粉の舞  
舞ゆてあかたれつさくり  
まらんたつくさみちるのよさか  
うの川友のたかそ是たり  
可也子ものそくさくさく舟  
又羽をよすはる粉の鳥か

尺鏡  
公  
徳意  
保吉  
公  
又  
公  
士  
公  
柳花  
共六  
花縣

頭叢夏



のほろろや大あらしと流るる  
せらち午乾うはうつる松の乳  
うき人のおれ火をけり自あか  
屋傭 唄に足もくくこれ 吟  
うき人のやいづれとて人の親  
うぬおろひのあれちり小夜気  
夕ぐしきうれは水にはあまね  
りの舟も人めたりうあか  
括くれ咽 忘れ平物の人  
心風平をまてとえうこれ 海  
志月 足りやうつうは流の男  
風ありんそとてくれ火の息跡か  
おのせと舟は倉らううぬか  
下るよともおろし 息あううぬか  
う舟りけハ榮の川 辺か  
長松ものりりりりれうあか  
流く流のつゆはむうあか  
成るうれ使さく人にあれう  
授子に授わわてあううぬか  
うき人の子やうつう人の所らん  
とそらうてまのうりうあか  
ま子あうそらうてあううぬか

後 妻 妻 妻  
あ 吐 兩 有 一 少 様 妻 眞  
あ 風 唄 斐 茶 女 光 菜 一 人

のほろろや大あらしと流るる  
せらち午乾うはうつる松の乳  
うき人のおれ火をけり自あか  
屋傭 唄に足もくくこれ 吟  
うき人のやいづれとて人の親  
うぬおろひのあれちり小夜気  
夕ぐしきうれは水にはあまね  
りの舟も人めたりうあか  
括くれ咽 忘れ平物の人  
心風平をまてとえうこれ 海  
志月 足りやうつうは流の男  
風ありんそとてくれ火の息跡か  
おのせと舟は倉らううぬか  
下るよともおろし 息あううぬか  
う舟りけハ榮の川 辺か  
長松ものりりりりれうあか  
流く流のつゆはむうあか  
成るうれ使さく人にあれう  
授子に授わわてあううぬか  
うき人の子やうつう人の所らん  
とそらうてまのうりうあか  
ま子あうそらうてあううぬか

後 妻 妻 妻  
あ 吐 兩 有 一 少 様 妻 眞  
あ 風 唄 斐 茶 女 光 菜 一 人



人のまれうまの旭おこるり

文の成れおれこつてさうり人

川れやう麗つるふふとに

盤翠の風をさるとまのひより

中絶 枝と盤翠の小樹か

まよふか盤翠の飛つておのま

川野やうれ成るも破別松

煉いふかおのまの中角に急延ん

追とて枝に志居くお枝を

おとれ拾て来りお枝を

まのまれ小まをさうかお枝を

陸奥

為毘

左弁

几董

菓左

白枝

百助

先来

末新

又助

言左

春竹

羽枝を

お枝を友とれりもわお枝を

あるひり一歩もせりお枝を

背にまき居お枝を

お枝を竿の帯にうたうし

鴨のまれまれまらうりお枝を

かたれま志つてさたるおのま

松れとこまてや麻の帯一角

八九ろ麻子入送る林りれ

まれ原けと麻子入をまれ

又つたの除ふらうら麻子か

瘦か子れ母と枕に麻子か

管云

塊魚

末着

魚遊

若之

貫色

子億

穴権

今

斗入

存亞

鴨子  
輕鳧子  
麻成角  
麻子

類聚



麻の子れきんてんてん様の実  
それなれ家なれつもの麻子か  
子やうくも麻と氣さうる瘦さるん  
りりけのやんてん八みるね麻子か  
旭の平けはーとわかさる麻子か  
馳走ーとさのちる来ね麻子か  
麻れ子の泣きそりり小道か  
芋のなれれれ下ろろー麻子か  
まき芝にのびぬろろ麻子か  
葉の実にほろ下麻子か鼻抱  
んりーらねろろ下麻子かり遠

吉川  
暁丸  
道亮  
奇園  
乙二  
養丸  
養子  
蕉白  
桂子  
玄性  
夏左

夏 麻

照 射

大 串

すくすくの大乳有はくし麻の夜  
そのそれと麻れ子かれつ松り妻  
かし帯をさる風想れろ麻れ親  
麻れ親篠ろく凡れのりりり  
萩冬に清されろ下ろろりか  
よりすくすくたろは峰の雪  
折角と清ろろろりりりり  
恋ーらねねてろろろろろろ  
そ路ふろろ忘れろろろりか  
親ハ子れ子ろろろろろろろろ  
曉ハ<sup>イの</sup>ちねろろろろろろろろ

可産  
微風  
甘谷  
一葉  
寛左  
保吉  
士助  
暁丸  
寛松  
護物  
葉更

題 兼 夏























短 虎  
角

又りるにひるまうさし席るる

薨左

短 女

短や平りも貴新し心の教

多解

短や平毛虫の上におうま

今

力ハ月夜ハ短者とおうり

曉基

短や平赤有城の上おらし

白権

短や平伽羅の白の約ふ丸

几垂

赤さうりり短者あれうま 枕

保吉

三りりれたや短者のうりりり

冠城

短や平隣りの意に打のうま

州江

短や平周衣に染るまのうま

士位

麻の尾に短者のりりりりり

長

短や平火のりりりりり

可教

短者のりりりりり

殿員

短や平人にりりりりり

完来

き里の短者あつりりりり

不寒

きりりりりりりりりり

百折

短や平存りりりりり

乙二

短や平大はりりりりり

今

短や平火に短者あつりりり

月化

短や平大るりりりり

月居

きりりりりりりりりり

素染

題兼夏



満りた出ても短き夜次ぐ風  
 短衣といふつるさぬ心の猿  
 是れ三人短き夜や考つら  
 たりとや夜の短きもあはら  
 短衣は年の風塵直りしなり  
 短衣は春を去りて暮るる夜の暮  
 短衣のさむげに立ちりきり  
 短衣といふ人心に居りしなり  
 短衣や春の暮れをうしやん  
 短衣はは跨よりふくむのう  
 短衣はあはれとより短衣なり

申多  
 素郷  
 武陵  
 袁丁  
 一葉  
 旦茄  
 沙光  
 美教  
 十年  
 其来

短衣は使うて共る松をふか  
 止薬のわりのさうに短衣の衣  
 短衣はうらなも短衣とやなり  
 短衣と提てまゝな花の字  
 短衣はくさくさのなり  
 短衣はさしとまうたの美  
 短衣は業場ふみにぬるなり  
 短衣はそれお世のさうなり  
 短衣はさしとまうたのなり  
 短衣は業場の精をうしやん  
 短衣はさしとまうたのなり

如  
 車両  
 葉丈  
 久臧  
 冬蔭  
 香風  
 梅柳  
 可考  
 岐山  
 几葉

短衣夜

題叢長



夏夜

明き夜を位児の病りれ  
跡と作る夜と隣に明き  
明き夜の男も人れ工に  
明き夜ととり形の間か  
明き夜と夜と乙子の歌  
明き夜と夜と位児の病  
明き夜と夜と又位児  
流と松押合つて夜の明  
人喜大やむ時夜の明  
夜の夜のたもぬれに音の

白樫  
水毛  
其郷  
号笠  
幽嘯  
星傳  
梅史  
其夫  
白路  
麓左  
感志

夏夜

夜の夜は寐ぬに起てや豆腐印  
夜の夜は下指し戸とあるそよみ  
いとふるととりたれする夜の夜  
夜の夜はそくにも置んふの上  
旅人の夜の夜をりきりぬ  
夜の夜は弓張りたうさりぬ  
夜の夜を毎日松れぬりぬ  
自是の才にそつて夜の夜一時  
いつ中も夜の夜はちれちると  
夜の夜は響るるも明にり  
むつりも夜の夜にありそよみ

五响  
返丸  
士心  
有心  
袂男  
榮兆  
朱吳  
葛三  
葵子  
穂中  
長島



夏  
力  
交の夜や二朝して見ると大花  
交の夜やとりつらね甚だ  
交の夜やあまらうのくにれ出  
交の夜と兼来うしたる毒も  
交の夜はんばにやのちのりし  
川ひらひ見て流る道そ交の夜  
買て来た牛に揉たり交の夜  
おんより市の手の交の夜  
きつに兵船や交の夜  
あふとま里人あや交の夜  
きつれを踏ハ流る交の夜

一葉  
寛松  
瑞子  
去陸  
宇息  
標元  
寛左  
会  
会  
会  
白橙

那中をばけし流る交の夜  
あとのき筋がそ交の夜  
夜を人の替へ頃ちり交の夜  
村白のそをみあうり交の夜  
交の夜人うまはる小豆か  
交の夜ももれてそあふ山路か  
にさむししの慈や交の夜  
丸帯のむすもきし交の夜  
交の夜やれしくも足あか  
船の軒の上にはたり交の夜  
交の夜ももるまはるそをれ

会  
軍更  
保吉  
岱喜  
斗入  
会  
大江丸  
又吹  
士飲  
恒丸  
謀六











友の月ぬれをきりて光けり  
卯一筆をてくせしき友の月  
流き下や白装よりあふ友の月  
月の夜に友のうらり寝きり  
岸と流はめりて友の月  
ありて又てさかじたり友の月  
友のぬれをちきりて入れり  
桐の木にちきりてあふ友の月  
友の月の多きをささねぬ友の月  
因りて友の月あふれきり大  
友の月あふれぬれりり

心非  
念境  
梅園  
蝶電  
流急  
陶里  
霧仙  
米汁  
風  
凡

蚊帳

友の蚊をほくろくさし月の夜か  
友の蚊あちち月の夜か運を  
ぬれし曲て出りり友の月  
見てをれ咽もなげん友の月  
友の月掃をさそれてあふりり  
友の月をほくろくさし月の夜か  
あちち蚊帳つりてささねぬ友の月  
あちち蚊帳つりてささねぬ友の月  
蚊をさして寝かぬ友の月  
蚊をさして寝かぬ友の月  
蚊をさして寝かぬ友の月  
蚊をさして寝かぬ友の月

文  
春一  
省己  
其夕  
左節  
左  
念お  
念  
白境  
保岩

願叢夏



老よりれ伸すは是も故の事  
たつこと若れ自のし入る枕故に  
こころも此情を這はる自原か  
藤て花れは月になきう情の内  
物息も久息も来を情の印  
故にの月は夕の小風枝よか  
月ハ故に墨てそろりと出にり  
引よをそ松をましくり情の枕  
へたこれかおのさあらし情の月  
原そより故にもの深しわか  
情の月思きくもやうあり

春の  
言に  
花鳥  
眼丸  
肩心  
長翠  
樽光  
今  
丈夫  
完素  
年心

白の夜ハ故やの七やののりりり  
情はるより一隅をくね枝に  
情はる世はこれまてと藤たり  
情はるよちるの河ぞや心は  
人の牙も藤にすむ密や情の月  
うやつわうちやま木の夕ろろあ  
り花の消れはうやの白はか  
心のりのたよりうくこれ故情か  
歩着生や故に一つそむつるま  
花の戸やうやもくろのそ  
情つれは田畑をた見ゆるん

白折  
九月  
九月  
岳格  
梅侯  
等老  
斗部  
恐晴  
茶劉  
三僧人  
獻英

題義良



紙 帳

附つゝわをりもやしこの家  
 ろろもせりもあつり附の風  
 せもこのひつたかすも附のわ  
 ことすれりもやれりもはるる原か  
 酔さもや附れりもさるこの紙  
 書くと附約よつりすれり  
 故下たれて戸さるる星のな夜か  
 約初て這入て見たり附の才  
 業平のたてあつりも附れり  
 家奔りも附れりもさるる上も  
 人持りも附れりもあつりも

文角  
 麦左  
 秋左  
 尾原  
 古左  
 後河  
 桃舟  
 子化  
 逢水  
 尾左  
 尾左

惟 子

折りしるいきやあ帳れま松ま  
 養木れむもさるるさるる帳か  
 松凡のひもさるるさるる帳か  
 惟子れ沙黄に男もさるる  
 惟子れ解し息やとと  
 惟子れ家屋と人に敷かきし  
 惟子や凡のそはゆるまの上  
 嘉ちつゝ惟子村の画虫か  
 惟子れ白きさるるさるる  
 惟子れ神より落ん奉りか  
 惟子や人のこえをるる草の凡

二人  
 其文  
 持好  
 尾中  
 其文  
 其文  
 其文  
 其文  
 其文  
 其文  
 其文

題叢長



道の亮  
 護物  
 星灣  
 雅歌  
 秋凡  
 惟平  
 芳高  
 平馬  
 不知此老  
 年人  
 几童

過、花

及羽織

との友も皆子すゝの口十しり  
 皆子の月夜洲 志嫁入か  
 皆子にふらの白の志すまき  
 皆子にまきく 年の夜凡か  
 皆子や帆の夕凡を衣柳ま  
 皆子を忘てむくみり大現  
 皆子これね皆子すし親の政  
 皆子や柳にふたるおん娘  
 五格 桜麻子すゝや過る不  
 こころ子や浴衣たるけしと志  
 ふれりてふれりこころし及羽織

房 物

完来  
 芙蓉  
 風角  
 又明  
 長翠  
 白麻  
 孔雀  
 薨左  
 檮堂  
 護物  
 左足

晒 布

手のふれ梳立洲 及羽折  
 古竹もそとけハカシ 及羽折  
 川越にちる人 命ひ人平の  
 孫形にふれて信し 及 衣  
 塔の羽や世の人 美れの及衣  
 神禱の美まに此の白眉  
 晒衣らひまやすしまま衣男  
 こころ子此まきいし晒衣  
 子此信し晒布揺く思ひ多り  
 定塔のおもも足るり晒川  
 梳人に帯りけり晒布揺

願叢友











一日の見よものたきん抄 解

一夜酒

此夜酒も華のそいつ 時

道亮

祇園云

力洋ノヤ人キ起リこつ

東吹

祇園云

祇園云ヤ美音ノ原も凡意

院甚

祇園云

房いよの月々十をいづ洋の児

甚市

祇園云

赤子よそのゆへあれ洋の児

大江凡

祇園云

舟とりれ巖に足とん洋の児

芸娘

祇園云

祇園云ヤ人のみ中ノ日お

一子

祇園云

祇園云これとれよとんやん右

道亮

祇園云

つるめれ志すかかろ埃ノ

尺又

萩とよと祇園云平しとん抄水

電燈

西瓜とよと祇園云の入りか

文角

百姓の隠居するや祇園云の云

鴈赤

十六夜宛書一や嘉定喰

草右

子母抄といふ久れとん嘉定の

護符

リもよと中ノ中野路のすこか

他力

徳すそつりよと中ノ中野路

道亮

すしげ中野路書したる中野路

美伊文

目見たりとれすことん不意とんし

風水

鏡ふ心ありとれとん不意とん訪

草右

とれいんとんとんし訪

唐来

嘉定

坐頭納涼

富士訪

題叢長



蝶の糸敷きも入る花子もて

鞍の巾代や巻の取柄を透せても

心梳子や巾代を巻く花子も

半夏生 同巻のに透速の足ゆれを交せ

面おりの襟たを巻くも交せ

土 用 上り足丸の巻巻巻巻巻巻巻

巾着や巾着の入を巻くも

つれづれも巻くも巻くも

巻くも巻くも巻くも巻くも

虫 干 巾干や巻の干巻巻巻巻

母人の振袖足たり巾干

白如

一痛

道亮

半橋

保若

一草

道亮

且こ

宗瑞

得半

揚の書ハ片はさうー古利干

虫干やうつら足丸の巻

巾干や巻の取柄を透せても

巾干や巻の取柄を透せても

巾干や巻の取柄を透せても

巾干や巻の取柄を透せても

巾干や巻の取柄を透せても

巾干や巻の取柄を透せても

巾干や巻の取柄を透せても

巾干や巻の取柄を透せても

巾干や巻の取柄を透せても

園更

凡律

百助

白龍

一醒

武凌

葉都

白龍

蝶若

葉若

葉若

題叢夏



大津画に丹の色なる黒か  
いと口の乱て黒きよえか  
り大津の字を黒き落りか  
りゆりの元と城のあつさく丸  
端ありて書子を遊る黒か  
つ黒く出れさくは瓜の皮  
松大津大津で地にたつ黒か  
黒りや目をぬれたる布の響  
ふれぬれか又黒き光りれ  
黒りやとり集たる黒れ  
黒りや小庭の松に遊るり

公 曉甚  
白 旋  
公 莖  
弘 臣  
保 吉  
祿 昌  
士 政  
公

大津の雲をありく黒か  
黒りや折りく掛く是の砂  
黒りや人の扇を二本を  
火を焚て黒くつじりか  
黒りを押さつて黒り基のと直  
配指に女の多き黒く  
方ひつれ黒くさかん黒く  
つくと人に直れぬ黒く  
黒りやるふりく黒くして  
黒くもは木をくれ黒く  
黒りやるふりく黒くして

公 松  
木 僊  
憐 氣  
来 貞  
完 来  
布 杖  
可 和  
瓦 全  
其 有  
其 築



是りや立寄る法もうろしの本  
呼吸人々の名是きりけりか  
是り此眼を休めりる春りか  
日暮もこころも人ま是りか  
是りやまればあてぬる嵐も  
柳もユエをさつる是りか  
むつりしや是と人のよに來て  
是りや夢情の跡に落松ま  
是りや此岸にちりたるを以か  
とまふつるもあつたまのそ  
新の志を砂にふるあてさりか

雲 権  
平 角  
陽 了  
与 塘  
卓 池  
冠 咏  
史 千  
白 多  
能 求  
如 古  
不 徑

うろし森のことむれはかの是か  
是り千人すまをハ風のふく  
十人々十色に染めりる是りか  
是りや命さけ出れまのよ  
是りや火桶入てあるはりか  
是りや角力とりあまの市  
是りや天や雲へ出る是りの先  
定天の白んは吹海の風  
定天やんはまことむ智の定  
り是りや白鷺をいりるまか

百 花  
桂 丸  
若 白  
不 語  
李 峯  
路 考  
古 笥  
之 付 人  
緩 駕  
勢 少  
丁 臨

題 是 是  
是 是 是



夕立に暮るるを自入遊りぬ  
 夕立に打もみ切たる花中か  
 夕立や只一折しにすこれ灰  
 夕立やなほもぬき人さし  
 夕立や門狭敷の人たちあり  
 夕立や雪をまつ心村 雀  
 夕立や流出たるむしれ 鳥  
 白百にその昔ふ良はるりりり  
 芥子の青帯の里ハリ夕立に  
 夕立や夕立かりて雪をうら  
 夕立のふもをぬく心家か

三浦人  
 夕立  
 咲甚  
 百吃  
 甚村  
 今  
 白権  
 尾 猪 丸  
 保 吉  
 今  
 跡 不

夕立や壘うらうらう  
 夕立や雀おしむ心村の中  
 唐庭や夕立の森の松拍  
 夕立や折て火を焚藪の家  
 夕立や世は是よりもしりり  
 夕立やふもをぬく心家か  
 夕立や志つたおりの筏さし  
 夕立や二度にり着る時の松  
 夕立のふりも屋をん子の白  
 夕立の森の昔そのさうし  
 夕立の森と白くと夜の咲

梅人  
 感 喜  
 祐 昌  
 士 郎  
 米 兵  
 可 報 星  
 屠 猪  
 一 字  
 長 為  
 道 亮  
 悉 轆



夕立の舟やゆれは涼しく  
 夕立や舟の上の是いそぎの  
 夕立の舟にゆらぐは煙か  
 夕立の先一月のり板くれ  
 夕立の舟に疎をと蓮の上  
 夕立の舟橋を渡る男くれ  
 夕立してそくた夕立をり  
 夕立に舟吹さくはくれ  
 夕立の舟をりけりぬそは蟹  
 夕立の舟て人すむ舟くれ  
 夕立に舟りとなり牛の舌

乙二  
 左榮  
 養之  
 武陵  
 奇園  
 雲桂  
 一葉  
 函嘯  
 舟波  
 儲史  
 一蕙

夕立や舟の白うたくれ  
 夕立や舟も木の方の舟をり  
 夕立は舟をりてり舟か  
 夕立や舟をりて舟くれ  
 夕立や舟に舟の舟  
 夕立や舟に舟の舟  
 夕立の舟も舟をり  
 夕立の舟舟より舟の舟  
 舟舟や舟舟舟の舟  
 舟舟舟の舟舟舟舟舟  
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟は  
 丹波  
 金堤  
 松員  
 舟波  
 舟波  
 舟波  
 舟波  
 舟波  
 舟波  
 舟波

題兼良











碎氷して牛の角うつぬか  
芦刈のこしてとらぬりぬ  
交せりぬの片も使ぬぬ  
それて打のうせとるぬりぬ  
人のぬゆしと打ぬ折もあり  
平しとりてかき手あきか  
夕暮の怨れつとるぬりぬ  
白巻して志しくぬむぬぬ  
まれおて涙路をゆや濡ぬ  
りの丸のぬむぬぬぬぬぬ  
惟先り管とらうしぬりぬ

保吉  
希言  
宋英  
瓦全  
冥  
長多  
一葉  
毫松  
等元  
大商  
身隠

園  
有

ぬきぬらうぬぬぬぬぬ  
りぬやぬぬぬぬぬぬぬ  
け片やぬぬぬぬぬぬぬ  
心やぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
朝り行ぬぬぬぬぬぬぬ  
さぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
桂つけの園つらぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬて志れぬぬぬぬぬぬぬ  
うぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

常笠  
漢物  
か漢藤  
ぬ中  
伊南  
三多  
六加  
菟左  
花市  
白龍  
几董

題叢表



一に二度と人のうちハリル  
白赤有隣一の義之にハレタリ  
混引のうちうとやハレタリ  
先ゆハ骨もたると混うとハ  
光珠うちより鳴るり古うとハ  
りものもたやうにやうとハハ  
うちハ丸く人の心ハ和らうと  
混うとハ破うとまもやうとハ  
うちうり板の敷に入れり  
床起うらうとハりり先れり  
うちうらうとハりりや方の星

美葉  
大江丸  
重厚  
又明  
士位  
ノ且  
成良  
兄直  
半免  
道亮  
美葉

汗 汗 拭  
良 拭

うちハ汗て先うとハりり  
や出て見ても沸きうとハハ  
のせて見るとさうとハりり  
梳人に浴さうとハりり  
謎とけと良やうとハりり  
海とけとうとハりり  
汗のよまもとハりり  
玉筆の圓うとハりり  
うち良ややれとハりり  
うち良ややの娘の人とハりり  
うち良やんとハりり

一茶  
堀前  
岳路  
几秋  
芽丸  
伊孫  
吳天  
一茶  
道亮  
芒市  
公  
乙二

題叢夏







抱 筭  
枕

抱筭や夜明て足れは花 芭  
 吹ぬりて枕をよしのし 枕  
 筭の枕をよしと云て夢ん  
 こけよまるぬに森を平 枕  
 拈作の歌に對して凡すし  
 すしとやあ仕舞なる井の糸  
 す凡や歌にふくもと枕を  
 すしとや明り日をとるぬか  
 亦すし古人の心あり  
 すしにに 繡とらる半の夢  
 すしとや清とさるる 踏の夢

海山  
 又 明  
 道 亮  
 養 之  
 采 更  
 菟 古  
 櫻 花  
 此 甚  
 瓜  
 白 檀  
 荳 木

涼

二三町ありふてり子すし  
 すしとや花屋の底の秋の子  
 すしとや夢もよむは花もさ  
 すしとや木を動して吹 移  
 村白や鶉の尾ふよすすし  
 すしとやと余して人の夢るぬか  
 人の人の並てすしき 楚うれ  
 すしとや死ぬ枕を古き一 枕  
 すしとや片よりく喰ふ影の服  
 すしとや見る方にくつ是の鳥  
 すしとやとよむハ甚うかるこ

紗 言  
 几 菴  
 秋 瓜  
 感 吉  
 保 吉  
 跡 石  
 瓜  
 天 明  
 斗 入  
 梅 人  
 荳 川

題 菴 夏



すしよのまゝくゝる子孫か  
ひすしをなれ切さるゝの上  
登る来てすしきたり極の上  
舟の公も見えずすしや松の房  
すしとや麻にたれたるまき道  
すしとよのなりに余る茶か  
すしとん嬉しん枕をたれり  
すしと田舎にんゆり夫婦か  
すしとよの人たるとは旅人こ  
すしとやたるとは老の良  
すしとんいとを今流ゆへき

履城 恒丸 士郎 公 若翁 樗牛 五管 榮兆 為三 米員 公

すしとや森疎んふれに入  
すしと風や天の原よりつ田より  
すしとや搔も是とぬ松花塵  
すしとや子等のまゝは夏の手の  
見るとはすしとぬの流にる  
すしとや下弦も氣也も二人か  
すしとをといひとぬり夏の版  
すしとよのともをたぬ月夜か  
長橋をゆられてすしと夜の燈  
すしとや流なつてきり  
すしとん退ては行く氣也か

可起里 公 不寒 定規 月夜 道亮 公 岳輪 平角 玉屑 夏迪



すしこや根巻に牛もつれきて  
す風に麻のついたるの目か  
前よりて志もろくすし猪のあ  
ね涼やけの美を約し春の海  
すしこや松をふり来る懶の秋  
すしこや樺のとりつて牛の産  
すしこに依れぬのふ来たり春の秋  
すしこや人を足るくは涼の秋  
すしこを忘れて藤のる木下か  
すしこのるるるやそのるるを  
すしこや昔のるるもあつた

養乳  
公  
等老  
一葉  
長為  
魯臨  
奇剛  
百塊  
夢ろ  
管華  
常也

自れとらぬをりけすし垣の子  
解すしとられて持ふ人より  
きほくすしとらるるわあのみ  
又やによりてすしや木の端  
あの子れを具すしや人の氣  
すしこに近のりもきん小田の雪  
えのこすしとらるりし時か  
ん片とすし垣極もあられさ  
風すし枕片とらるる趣きて  
すしこや葉のちりし牛もあ  
すしこや小笠のるる巻の枝

護物  
三片人  
具也  
雲権  
芦華  
玄陸  
我意  
對心  
百考  
小片人  
文角

題義及

百廿二







狭赤き急釣に先々すこ  
芦ののユまして見る涼水  
網舟の足らぬやうり涼水  
思ひつらぬらんすこすこ  
下すこ力強らん木の本か  
かしよや人さむ言飲の下す  
追のけてかの中をこすこ  
船ゆらん醫師も足る夕涼  
それと振とまひし公を涼水  
秣りふりをとるすこすこ  
舟もこすこ舟もこすこ

曉甚  
多疎  
甚亦  
薙左  
軍文  
百將  
也且  
几董  
今  
保吉  
斗入

○百廿五

袴着る人ハおまうしうすこ  
くそそ原凡どれあをう骨  
涼水とて人の長るは涼水  
たのしや舟とて人てり人  
心すこも嬉もさすこおまのうら  
そそ心そそ換換や橋すこ  
あそびのすこもさそと釋  
漁火とて人て嬉すこすこ  
すこも流のうすこすこ  
すこも柳に秀の然るすこ

梅人  
大江丸  
尺明  
代書  
恒丸  
存亞  
士位  
人  
丈左  
芳之  
之顧

題表長



力代のまじりかゝるやすきふ  
前張のうさゝめてもありく  
人志のふらふらり川  
の涼こ人の葉の暖にたり  
才のふれ遠くしてつる  
たましくは庭ふむ気と  
母ありとゆふりのあり  
夕すこゝ葉の欠を  
をしちのゆきやけり  
も凡に字のつら  
たよりんぬる人

善哉  
如泥  
定雅  
一葉  
瓜  
月化  
木海  
寛松  
蕉百  
学笠  
百池

薄飯のさかしく  
花白すくふまも  
もれ名を  
授子れ  
百すて  
あちち  
驚い  
すむ  
二ッ子  
夜ホ  
り年

護物  
身隠  
羨々  
女志字  
葉也  
谷権  
路因  
月更  
詠陶  
文略  
吾友

題義夏



風 蕙

水 氷

夏並に石をのこつりて涼  
 涼甚し日あつるをと梳り風  
 麦葉の黄火をくしつて  
 風をさすれ櫃に梳り風  
 風をさすれ櫃に梳り風  
 橙の久るまをさすりて  
 風をさすれ櫃に梳り風  
 暖やさく見ゆれ風をさすりて  
 梅をさすれ櫃に梳り風  
 管末をさすれ櫃に梳り風  
 二人してむすへて溜る風をさすりて

斗園 伊豆 雲龍  
 寄桂 石原 保吉  
 今 道亮 乙二  
 一葉 金花 七五  
 少 木

石工の鑿を冷したる風をさすりて  
 暖のすむぬれをさすりて  
 心吹れぬれをさすりて  
 撥多村の表を流る風をさすりて  
 一すむれをさすりて  
 八九万をさすりて  
 立寄をさすりて  
 徒む人もその影をさすりて  
 竹をさすりて  
 晴しや風をさすりて  
 立寄ハ物ねをさすりて

公 鳥 几 公 頁 左 涼 藤 石 五  
 公 鳥 几 公 頁 左 涼 藤 石 五

題 叢 臣 友



時よりや佳き花宿の小梅干  
常花筆をまをさうけしうか  
字ふめいさうあううしうか  
尺やうと田んをいばはしうか  
石を揮ひて夜の雪おや落しう  
草早にけしうしうのしうか  
人七つはまをいしうか  
筆を提てつら得したうしうか  
表法に表余おしうか  
佳き心は表えてさねたれり  
新ふさう紫にまをさうしうか

炬 九  
土 九  
梅 九  
棠 九  
完 九  
年 九  
喜 九  
尺 九  
長 九  
表 九  
梅 九

たあうちさうちう力かまの佳きか  
表けりとえとけてのしうか  
君の代の心のけりまをしうか  
は佳き酒をさうはとまのいなり  
半のりハあねきまをいしうか  
松凡ととれきうしうか  
尺よふくとまをさうしうか  
とととまをいなりしうか  
世の花のちるは佳き道しうか  
人けりの提てまをさうしうか  
終るもまをいなりしうか

常 九  
臣 九  
函 九  
三 九  
万 九  
漫 九  
久 九  
寺 九  
小 九  
湖 九  
葉 九

題叢夏















何骨や凡紅をまゝの物也  
 骨蓮下扱り白く三りり  
 花 吟の葉を抱へて咲やりの花  
 大いれあはる千りの心  
 白やや新けあはるりの心  
 其爪  
 澤屋  
 拍翠

蕁 菜  
 新けあはる蕁に添て九月涼し  
 多産に凡見る河松のそよぶ  
 其爪  
 不助

海 松  
 多産に凡見る河松のそよぶ  
 此よりあはる蕁の心  
 蕁の心  
 出晴  
 李 东

交 子  
 交子やこぞを道ある枝 春  
 交子に操多の折をまゝ  
 交子にす淑歌新なる夕日か  
 交子やそよ小舞ハ心の咲  
 交子や一際ありて河原松  
 交子にるあひし 男 くれ  
 交子にわさり垣ハ黒木か  
 交子や物明り夜ハ道のたの  
 交子や井もあはる松二ッ  
 長き片とまゝあはるし 交の子  
 刈入て扱交子大いれれ 春  
 見方ハ白くあはるて交の子 帰 春



芒 芒 芒 乙二

思 思 思 乙 棟

剪 剪 剪 乙 道 堯

釣 釣 釣 乙 白 棟

鸞 鸞 鸞 乙 子 尋

凡 凡 凡 乙 層 人

玉 玉 玉 乙 後 鸞

鴨 鴨 鴨 乙 道 堯

葎 葎 葎 乙 希 因

射 射 射 乙 吾 仲

鬼 鬼 鬼 乙 力 化

赤 赤 赤 乙 吐 月

麻 麻 麻 乙 暁 甚

題 叢 夏



麻をうす女あはれや左 湯  
麻刈の麻おちあはれはこそ  
麻赤く垣州りに起ぬ畠か  
志く入やふのたては麻の家  
麻島や向ひの場々友をうら  
まをれは麻の道は白んるま  
白の景ひふどおや麻島  
麻刈かつれうくされる道か  
鶯の活てかたり麻の家  
まをれはあはれししや麻ふ本  
女の児あはれ越ぬに麻すうり

又 白 保 長 瓦 道 奇 電 三 護 力  
明 垣 吉 翠 全 亮 劇 燈 津 人 物 呼

藍刈

藍刈て新毒のわくあはれなり  
麻刈て松風とるるあはれ  
麻畑や白のよそれをたぬあ  
刈藍に十差白ふ小百わ

相 何 相 相  
接 日 接 接  
柔 置 置 置  
乳 置 置 置  
沙 置 置 置  
王 置 置 置

綿衣

綿衣の帯さおひや綿の衣  
やハヤやうりおんがや綿の衣  
類白のすうやうり色綿の衣  
木子りうりうり色綿の衣

相 相  
接 接  
巴 巴  
水 水  
月 月  
白 白

着

花 杉の衣は古きとつれ着の衣  
着ふや袋うらへてや 襦

着 恒 跡 微  
川 丸 前 凡



若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて  
 若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて  
 若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて  
 若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて

若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて  
 若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて  
 若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて  
 若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて

夏 舞

報子花

若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて  
 若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて  
 若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて  
 若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて

若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて  
 若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて  
 若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて  
 若くは素の心うらまへて  
 昔のふとくうらまへて

題兼夏



吾良に物の上をぬるる  
 吾良に親のふとまじらぬ  
 吾良にうきをう人松の陰  
 吾良や羊火焚きぬり付て  
 吾良にふて足らぬ八重を  
 吾良にふて人とのたする  
 吾良のふにわさる心ぬか  
 吾良やふもたのふ垣一色  
 吾良にふとさるむさるか  
 吾良やふよりむさるのふの  
 捷ふやふをぬるふとすし捕らふ

又境  
 きせ  
 白柳  
 道亮  
 一学  
 奇則  
 様中  
 万松  
 来親  
 右境  
 湖中

○百廿六

く  
顔

吾良や万二千の堀の上  
 吾良にふすふてむさるる  
 吾良や松のふじらぬ良  
 吾良や花にむさるるの月  
 吾良のふにむさるるもさる  
 吾良にふ吹くむさるる  
 吾良やふのふむさるる  
 吾良のふやむさるる  
 吾良やまむさるる  
 吾良のふむさるる

芝山  
 美穂  
 籠崎  
 野泰  
 吾友  
 典路  
 松白  
 左岸  
 鳥藤  
 今  
 院甚

題業夏



夕良のふと立されど此境  
 夕良の指やつ田の角屋と  
 夕良の花くじ猫や余込ん  
 夕良や花に嵐の歩りす  
 夕良やふのこめく極く  
 夕良やひりしは繁も白りし  
 夕良も風むすふの舞り  
 暮打けは夕良の家長子と  
 夕良やおあつるは別本記  
 夕良や子れ這てあつる  
 夕良や今に白くを改めん

今 草 右  
 草 右  
 百 明  
 白 境  
 鳥 秦  
 代 吉  
 人  
 甲 斐  
 松 後  
 大 印 丸

夕良や烟て有きりし人  
 夕良の花のあつる料理か  
 夕良のふのこめく極く  
 夕良や余込のをたる標光  
 夕良や味のをの泣きと  
 夕良や雀の房る夏の中  
 夕良や活をくす戸一枚  
 夕良や夕良大花にりりり  
 夕良や夕良大花にりりり  
 夕良や夕良大花にりりり  
 夕良や夕良大花にりりり

存 亞  
 其 六  
 長 翠  
 木 僊  
 葉 光  
 朱 炎  
 方 有  
 午 心  
 完 末  
 岳 輪  
 核 串



















月吟

小 辨  
つゆの塔うらまゝ不辨  
錯 釣 鑑つゝ不辨火うらわ浪の上  
海月取 鑑を押しもたふさうさう  
伸 鑑 鑑を押しもたふさうさう

祭  
呪ふやうの箱もあふく  
藤たすの庭やまの小屋  
白花しらね帯もやま

乙松やこゝし糸の糸  
伸 鑑 鑑を押しもたふさうさう  
詮人の凱陣よりそ伸 鑑  
まのひらた動をこけり伸 鑑  
呪ふやうの箱もあふく  
藤たすの庭やまの小屋  
白花しらね帯もやま

兼基  
村江  
百城  
道亮  
長高  
一葉

交米樂 探牙に辨うけりまを交米  
日折使 巫婆の折月十とくま使  
多白まねたり使やあ男  
清 板 せきして金辨しまは板か  
人去て誠足るなりは板か  
本位に又あはるは板か  
矢のちのちあはるは板か  
けくたふさの板はてふは板か  
たふさの板も板か  
蓬見たりそのまは板か

久 臧  
甚 村  
律 大  
芥 杓  
尊 右  
瓜  
甚 杓  
瓜  
白 境  
保 吉

題叢夏



世の世にたつしは後の子し  
は後してまや花色の狭くは  
牙にさす若さを折ては後か  
若さの道の出るさるは後か  
酒後もあるやそは後河  
涼しなや心ちもそは後の  
は後とては一人にふの月  
は後たは七又眼も極はは  
灯籠のやうな花さくは後か  
光信の画にまゝさるは

松元  
士郎  
八  
若之  
米貞  
若三  
書牛  
左亮  
今  
一葉  
幽嘯

川 社  
眺のころは造る能くは  
は後してまにさる狭くは  
涼しき煙のいれぬは後か  
は後して初まの冷ん聖うら  
花吹雪をそそめたりは後か  
は後するや若は落るは  
拍子に魚のうりきり川  
あなかにあつ節とや河は  
秋代や男女のししきり  
秋代とて吹ふる世は後か  
若の端  
ふきれ既と先へ若は端か

二序人  
去曲  
有斐  
石海  
白泉  
双鹿  
白尾  
漫之  
様豊  
一葉  
感書

題義夏



子とつれて青北端をさるまぬか  
 二交月をさる(むけ)る青北端か  
 あさるんてわけるちれとくれ  
 ひろつて交をもわかれちれとく  
 白やちのまをりし人のと  
 志しらぬ神を合はれちれとく  
 互探えて松尾に狗の邊りか  
 交の夜を是寸毎の枕うれ  
 ちかちや互探起をハツたり  
 交癒れ乳乳骨揺る探えてか  
 交癒不別て宿の徳にゆく

大江尾  
 方あり  
 不寒  
 乙二  
 岳輪  
 保吉  
 探せ  
 道老  
 寛右  
 表陽

交 瘦の男らしきちかちりりり  
 交 瘦やけを笑約し日本様  
 交 横心を出ぬして交のそ  
 交のそを風白鷲と飛たたり  
 交心の白一色に霞にたり  
 交の心より刺さるやちりり  
 交その夕をさる端心か  
 交に余りてさる交の心  
 交と和しちれ魚さる交の心  
 交心を見て立あゆみか  
 交の心大石居しとちりりり

存  
 松清  
 之庵人  
 馬頂  
 保吉  
 不助  
 恒丸  
 米貞  
 南三  
 源心

題叢夏











入古の跡しき交と交にたり。  
心機や古交ありは交とあり  
をりりり交にするは交とあり  
河下や河とありわ交の氣  
交りや機を本陰の斜理のり  
又も交の交の心机  
村るハちとを交れと交ハ来る

五換

陽子  
交松  
此の非  
能味  
確合  
惟平  
方斜





